932
c058a2
K
00690949

納本

Eugene O'Neill

あゝ荒野

北村喜八 譯

文藝春秋新社版

ああ、荒野！

追憶の喜劇

932
C058a2
K

國立國會
41.3.31
圖書館藏書

690949

Originally published under the title of "Ah, wilderness!" and copyrighted in 1933 by Eugene O'Neill. All rights reserved. The Japanese translation is published by special arrangement with the author.

原著は「ああ、荒野!」の題名にて出版。一九三三年ユージン・オニールによりて著作權登錄。一切の權利を所有。日本語飜譯は原著者との特別の契約によりて發行。

その昔、彼もまた、先の細い流行のズボンをはいて、破滅への道に沿つて、心とろかす遊蕩三昧の生活をおくつた

ジョージ・ジエン・ネーサン　へ

人物

ナット・ミラー　イヴニング・グローブの社長
エシー　その妻
アーサー
リチァード
ミルドレッド
トミー　その子供たち
シッド・デートヴィス　エシーの弟
リリー・ミラー　ナットの妹
デーヴィド・マッコーマー
ミューリエル・マッコーマー　その娘
ウィント・シルビー　エール大學におけるアーサーの級友

ベル
ノーラ
酒場の給仕
外交員

場面

第一幕
コネチカット州の大きな地方都市にあるミラー家の居間――一九〇六年の七月四日の早朝。

第二幕
ミラー家の食堂――同じ日の夕方。

第三幕 第一場
小さなホテルにある酒場の奥の部屋――同じ日の夜の十時。

第三幕 第二場
第一幕に同じ――ミラー家の居間――同じ日の夜の十一時をすこし過ぎた頃。

第四幕 第一場
再びミラー家の居間――次の日の午後一時頃。

第四幕 第二場
港に沿つた海岸の一部――同じ日の夜の九時頃。

第四幕 第三場
第一場に同じ――居間――同じ日の夜の十時頃。

第一幕

コネチカット州の大きな地方都市にあるミラー家の居間――一九〇六年七月四日の朝七時半頃。

部屋はかなり大きく、家庭的な外觀を呈し、朝の光で生きいきとして明るい。家具類は、その時代の、一目でそれとわかる中どこの値段の沒趣味な代物である。左手、前寄りに、窓が二つあり、その下にソファが一つ壁にくつつけて置いてあつて、絹や繻子のクッションが載つてゐる。ソファの向うには、硝子戸のはまつた本箱が一つあつて、壁の殘りの部分を占め、それには廉價本の叢書が一ぱい竝んでゐる。正面の壁の左手には、引戸とカーテンの二重になつた戸口があつて、暗い、窓のない奥の客間の通じてゐる。この戸口の右手に、もう一つ本箱があるが、前のよりは小型で、戸がなく、少年少女向きの本や過去數年間に出たベスト・セーラーの小說類がぎつしりと詰まつてゐる――それらがこの一家のほんとうに讀んだ本なのである。この本箱の右手に、引戸とカーテンの二重になつた戸口があつ

て、左手のと對になつてゐるが、これは光線をよく取りいれた表の客間に通じてゐる。右手の壁には、奥寄りに仕切戸があつて、ヴェランダへ開いてゐる。同じ壁の前寄りには、窓が二つあつて、その中間に書きもの机と椅子が一つ置いてある。部屋の中央には大型の圓いテーブルがあり、綠色の笠のついた讀書用ランプがのつてゐて、そのコードは天井のシャンデリアの五つのソケットの一つにつながつてゐる。テーブルのまはりには五つの椅子が竝んでゐる――左、右、右奥寄りの三つが搖り椅子で、正面と左奥寄りの二つが肱掛椅子である。中どこの値段で厭味のない絨氈が床の大部分を掩つてゐる。壁には、明るいが醜い青い色の模樣のある白い壁紙がはつてある。

奥の客間の向うにある食堂から話し聲がきこえてくる。そこでは、この一家のものが今しも朝飯を終へようとするところである。ミラー夫人の、命令でもするやうに調子をはつた聲、「トミー、こつちへ歸つて、牛乳をの

んでおしまひ！」同時に、トミーが奥の客間から戸口へ現はれる。――彼はくりくり肥り陽に焼けた十一歳の少年で、黒い目をし、金髪を水でぬらし、分けてぺったりと撫でつけ、明るい善良さうな顔をしてゐる。口のまはりには牛乳のついてゐるのが見える。抑へてゐた精力を、七月四日の獨立記念祭に吐きだしてやらうと待ち設けてゐたので、體ぢゆうがもうう、うずしてゐるのだが、母が呼んだので、服従するやうに、ためらつて立ちどまる。

トミー　（嘆願するやうに呼びかへす）たつて、僕、おなか一ぱいなんだよ、ママ。それに、もう澤山だと言つたら、よろしいつてママ言つたぢやないの。（母親に何か言つてゐる父親の聲がきこえる。それから母の聲がする。「よろしい、トミー。」そこで、トミーは熱心にたづねる）ぢや、行つてもいいかい？

母の聲　（訂正して）もつと丁寧におつしやい！

トミー　（そはそはしながら、しかし柔順に）行つてもよろしいですか。

母の聲　よろしい。

トミーは「用意、ドン」で飛び出してゆく短距離競争者のやうに、右手ヴェランダの仕切戸へ飛んでゆく。

父の聲　（そのうしろから怒鳴る）おい、爆竹はうちの近くでやるんぢやないよ、分つたか！

しかし、トミーはすでに仕切戸から飛び出したあとで、戸は明け放しのままになつてゐる。

間もなく、家族のものは食堂を出て、奥の客間をとほつて姿を現はす。最初に、ミルドレッドとアーサー。ミルドレッドは十五歳の少女で、背が高くほつそりしてゐて、大きな不揃ひな目鼻立である。父親によく似てゐて、どう口實をつけてみても義理にも器量よしとは言へない。しかし、その大きな灰色の目は美しいし、快活さと、人をうつとりさせる微笑にめぐまれてゐるので、誰でも彼女を魅力のある娘だと思はずにはゐられない。

その時代の流行の胴着とスカートをつけてゐる。

アーサーはまだ家の世話になつてゐるミラー家の子供たちのうちで一番の年上であつて、十九歳である。背が高く、がつしりしてゐて、胸が厚く、筋骨逞ましく、その時代のフットボールの線審判者（ラインズマン）のタイプであつて、四角ばつた無神經な顏、小さな碧い目、毛の多い茶色の髪をしてゐる。その立居振舞は眞面目くさつたカレッヂ風である。服裝も當時の最新流行のカレッヂ・スタイルであつて、數年前の極端さからいくらか緩和されてゐるものの、それでも肩のところには詰物し、ズボンの先は半分位に細くなつてゐるので、廣く開いてゐるべきズボンの裾口が非常に狹く、靴をはいたままでは脱ぐことができない位である。

ミルドレッド　（出てきながら――詮索するやうに）今日はどこへ行くの、アート？

アーサー　（偉ぶつて）お前の知つたことか。（彼は派手な態度で、大きなY（エ

ール大學の頭文字）と卒業年度を書きこんだ煙草入と、大きなブルドック型のブライア製（薔薇の根でつくつたもの）のパイプを、ポケットから取りだして、パイプに煙草を詰めはじめる。）

ミルドレッド　（からかふやうに）だつてさ、ちやんと分つててよ。彼女の頭文字言つてみませうか。E・R！　（彼女は笑ふ。アーサーは女にちやほやされる自分の腕前を暗に仄めかされたので、滿更ではないのだが、威嚴を取りつくろつて安つぽく返事をしない。テーブルのところへ行つて、パイプに火をつけ、朝の地方新聞をとりあげ、それから、テーブルの左手奥寄りの肱掛椅子にだらしなく掛けて、新聞の見出しを拾ひ讀みしながら、口笛で「もう一度ワルツを踊つてよ、ウィリー」を吹きはじめる。ミルドレッドは、左手前方のソファに腰を掛ける。）

その間に、母親と、父の妹であるリリー叔母さんとが、彼らのあとに續いて、奥の客間から出てきてゐる。ミラー夫人は五十歳にちかく、小柄で、

肥つてゐて、艶のなくなつた淡褐色の髪にはすこしばかり白髪がみえるが、若い頃は、圓顔の、可愛らしい、目鼻立の小さな、目の大きいタイプの娘として、必ずや美人だつたにちがひない。その大きな茶色の目は、柔和で、母親らしく――その擧動は一家の主婦らしくいつもせかせか忙しさうにみえる。胴着とスカートをつけてゐる。

彼女の義妹であるリリー・ミラーは四十二歳で、背が高く、色が淺黑く、やせてゐる。外見上、眼鏡をかけてゐる點までが、老孃の學校教師の傳統的なタイプにぴつたりしてゐる。しかし、眼鏡のうしろの灰色の目は、もの優しくて、疲れてゐるやうであり、全體の感じは內氣で心のやさしさを感じさせるものをもつてゐる。その聲は外見とはいちぢるしい對照をなし――もの柔かくて、甘さにみちてゐる。彼女もまた、胴着とスカートの服裝をしてゐる。

ミラー夫人　（出て來ながら）あの子に牛乳をのませるのは、骨の折れるの何の

つて――（突然、仕切戸が半ば明け放したままになつてゐるのに氣がついて）おやまあ、あの戸をごらんよ、また明けつ放しにして！　家ぢゆうが蠅だらけになつちまふ！　（つかつかと戸をしめにゆく）あの子に何度話したかしれないのに――やつぱりこれなんだからねえ！　これぢや、しやべるだけ無駄だわ！　（戸をぴしやりとしめる。）

リリー　（微笑しながら）だつて、そりや無理ですよ、いくら子供に戸をしめるのを忘れるなと言つたつて――七月四日の獨立記念日ですもの。（彼女は、坐り心地のいい椅子は他の人たちのために殘して、自分は遠慮して右手前寄りの机の前にある背のまつすぐな椅子の方へ行く。）

ミラー夫人　あなたつたら、いつだつてさうなのね、リリー――あの子のために始終辯解ばかりしてさ。わたしといふものがゐるのに、あの子をすつかり臺なしにしてしまふんだわ。（テーブルの右手の搖り椅子に沈んで）ああ、暑い！　あなた暑かなくて！　今日はとても暑くなりさうね。（テーブルから雜誌を取りあ

げ、それで煽ぎながら椅子を揺すりはじめる。）

その間に、彼女の夫と彼女の弟が、二人とも葉巻をふかしながら、奥の客間から出てきてゐる。ナット・ミラーは五十代もだいぶ老けてゐて、背の高い、色の淺黑い、痩ぎすな男で、すこし猫背で、頭はすくなからず禿げあがつてゐる。服裝には生れつき思慮のないのをいいことに、滋い良さといつたものを狙つてゐるが、何となくぎごちないところがある。その長い顏は、大きくて、不揃ひな、これといふ特徵のない目鼻立であるが、その灰色の目は、美しくて、怜利で、ユーモラスな輝きをもつてゐる。

彼の義弟のシッド・デーヴィスは四十五歲で、背が低く、でつぷり肥り、禿げ頭で、ペック〔アメリカのジーナリスト〕の書いた「惡童物語」に出てくる、決して大人になることのない腕白小僧のやうに、惡戲好きな面構へをしてゐる。彼の服裝は、昔はひどくしやれてゐて派手な輕裝だつたのだが、今は形が崩れ色が褪せて型も色もあつたものでない。

シッド　（出て來ながら）さうさ、ナット、何といつたつて仕事が第一さ。ウオターベリーってとこは、これで勝手がわかってくると、警察の目の光らない粹な古い町だよ。僕はね、話のひとつに冗談をひとつかつとばしたんだが、あすこの連中面白がつて、はつはつ笑ひこけたつけ。ウオターワーゴンの禁酒生活――ウオターベリーの安時計――ウオタールーの敗北――ウオターのつくところすべてかくの如し！

ミラー　（にやにやしながら）そいつあよかつた！

シッド　（滿更でもなささうに）われながら上出來だと思つたよ。（心に秘めた或る悲しみに壓せられたかのやうに、すこし悲しさうに續ける）ウオターベリーには生きた生活があるよ、全くだよ――つまり、君がウオターベリーで生きた生活を探し求めるならばだ。

ミラー夫人　ウオターベリーがどうしたんですつて、シッド？

シッド　ウオターベリーにはウオターベリーなりのいいところがあると言つてた

んですよ――しかし、家庭にまさるよきところなしでさあ。（この言葉に逆ふかのやうに、外のヴェランダのすぐ向うからパンパンいふ音が連續して聞えはじめる。トミーが一包みの爆竹に點火して、彼のお祭を開始したのである。部屋に集つてゐる家族のものは椅子の中で飛びあがる。）

ミラー夫人　あの子だわ！（仕切戸の方へ突進し、ヴェランダへ出て、叫ぶ）トミー！　お父さんが何ておつしやつたんです！　引玉は裏庭へいつておやり。分りましたか！

アーサー　（輕蔑するやうに顏をしかめて）生意氣な奴だ！　うちのものを嚇かすためにわざとやつたんだ。

ミラー　（困惑してにやにやしながら）仕様のないちびだ！　あいつ、日の暮れるまでに、この家を火事にしてしまふだらうて。

ナット　（にたりとして歌ふ）

あの娘の名前は知らないが、

薔薇にそつくりそのままだ。
あいつの名前は存ぜぬが、
ローズ・ヴェルトにそつくりぢや。

一同、笑ふ。

リリー　まあ、シッド、氣でもちがつたの！（シッドはにこにこした笑顏で彼女を見る。ミラー夫人がヴェランダから戻つてくる。まだぷんぷん怒つてゐる。）

ミラー夫人　やつと裏の方へ追ひやつてきたわ。これですこしは靜かになるでせう。（これに逆ふかのやうに、爆竹と癇癪玉のパンパンといふ音が、左手、家の後方から起り、この場面の終るまで、引き續いて時々きこえる。それは最初の爆發ほど大きくはないが、それでも會話を邪魔してその腰を折るには十分である。）

ミラー　ところでと、今日はみんなどういふ計畫をもつてゐるね？　シッド、君はもちろん僕と一しよにセイチャム・クラブの園遊會へ行くだらう？

シッド　（ちよつときまり惡さうに）そりやもう。僕は行きたいんだがね、ナッ

ト――といふのは、もしも――

ミラー夫人　（ちよつと疑ふやうな笑顔でシッドを見て）ふん。わたしには分つてゐますよ、セイチャム・クラブの園遊會つていつもどういふものだか。

リリー　（本氣過ぎるくらゐ本氣なのだが、それを隱すやうに、强ひて冗談めいた口調で口をはさむ）いいえ、今度はちがふんですよ、エシー。シッドはね、ウオターベリーで新聞に働くやうになつてから、人間が變りましたのよ。少くとも昨夜わたしにさう誓つたんですもの。

シッド　（たじたじとなつて、彼女の視線を避けながら――冗談にしてしまふ）吹き寄せられし雪のごとく汚れなし、それが僕さ。僕はね、女子キリスト教禁酒同盟の會長に推されてゐるんだよ。（一同、笑ふ。）

ミラー夫人　變りものね、あんたは、シッド。あなたときたら何でも冗談にしてしまふんだもの。でも、氣をつけて頂戴、いい？　今夜はうちで御馳走をすることになつてゐるんだから――今までに喰べたことのないやうな飛つきり上等のお

肴料理なの。だから味も何も分らなくなつてから歸つてもらひたくないんですよ。

リリー　今日は氣をつけてくれますわ、きつと。ねえ、さうでせう、シッド。

シッド　（一層きまり惡がつて――芝居もときに冗談にしてしまふ）リリー殿よ、御身に誓ふが、もしわれに酒を薦むるものあらば、そやつを切り殺してくれん――と言ふのは、そいつ氣が變つて酒をのませないと言ふならばだ。（一同、笑ふ。ただリリーだけは唇を嚙み、硬くなつてゐる。）

ミラー夫人　この人に何を話したつて無駄ですよ、リリー。あなたには今までによく分つてゐるはずぢやないの。まあ、そのうち何とかなることもあるでせうから、悲觀しないでゐますかね。

ミラー　さあ、御婦人がた、シッドをいぢめるのはそれぐらゐにしたらどうだ。今日は七月四日だ。いくら虐げられた新聞記者といへども、自分の休みの日を享樂する權利ぐらゐあらうぢやないか。

ミラー夫人　わたしはね、シッドのことだけ考へてゐたんぢやないんですよ。

ミラー　（他の人たちに目で合圖して）すると何かい、お前はあてこするつもりなんだね、まるで僕が――

ミラー夫人　だつて、ありていに言つて、あなたの仰しやるやうなとこぢやないんですもの。あのいまいましいセイチャム・クラブの園遊會からお歸りになるときの様子でよく分つてゐますよ。あなたがいらしたところは、ただの泉ぢやなくて、どつか他の場所だつてことが、誰にきかなくともわたしにはちやんと察しがつきましたからね。（人の好ささうな微笑をする。ミラーはくつくつ笑ふ。）

シッド　（硬くなり黙つてゐるリリーの方を、ちらと盗み見してから――アーサーの方へ向いて、急に話題をかへる）よう、「フレ、フレ、エール大學」。君は七月四日の祭日をどういふ風に過すんだい？（アーサーは勿體ぶつて、しやちよこばる。）

ミルドレッド　（からかふやうに）兄さんが話したくないんなら、あたしが言ひませうか。

ミラー夫人　（微笑しながら）ランドさんのお宅へ行くんでせう、きつと。

アーサー　（勿體ぶつて）僕とバート・ターナーで、エルジーとエセルのランド姉妹を小舟に乘せることになつてゐるんです。みんなで苺島（ストローベリー・アイランド）へ行つて、ピクニックのお書の辨當をすませ、晩にはランドのうちで晩餐をとることになつてゐます。

ミラー　それでお前の方は説明がついたと。ミッド、お前はどうする？

ミルドレッド　あたしは海岸のアン・カルヴァーさんのとこへ行くわ。

アーサー　（皮肉に）もちろん、男の子は來てゐやしないだらうな。たとへば、ジョニー・ドッドなんか？

ミルドレッド　（くすくす笑ひ――それから頭をコケティッシにうしろへ反らして）ふん！　あの子なんて何さ。海岸にはあんな小石はいくらも轉つてゐてよ。

ミラー　およし、二人ともいつまでもからかつてゐるのは。エシー、お前とリリーはどうするね？

ミラー夫人　さうね。わたし、別にこれつて計畫が立つてないんだけど。リリー、あなたは？

リリー　（おだやかに）わたしも。あなたのなさりたい通りでいいわ。

ミラー夫人　わたしはね、ここいらの椅子にかけて、體をらくにして、お喋りでもしてゐようかと思つたの。

ミラー　お喋りならいつだつて出來るぢやないか。今日は四日の記念日だ。僕にはもつといい考があるんだよ。どうだい、自動車でドライヴするのは？　僕はビーックを出してくるから、みんなで町なかを乘り廻して、燈臺へ行つて歸つてきちや。それから、シッドと僕は、お前たち二人を、ここか或ひはどこかお望みのところでおろして、そのまま園遊會の方へ廻ることにしよう。

ミラー夫人　とてもいいお考へですわ。どう、リリー？

リリー　すてきですわ。

ミラー　ちや、これですつかり決まつた！

シッド　（もぢもぢしながら）ねえ、リリー、今夜、僕と一しよに海岸へ花火を見に行く氣があるかい？

ミラー夫人　それがいいわ、シッド。この人を連れだしてあげて頂戴。可哀さうに、リリーつたらいつもわたしと一しよにうちにゐて、何ひとつ樂しみがないんですもの。

リリー　（まごつきながら、感謝するやうに）わたし――わたし、一しよに參りますわ。シッド、有難う。（それから、心配さうな表情になつて）ただね、醉つてお歸りになりさへしなければ――

シッド　（またしても、きまり惡がり、たじたじになつて――またも、眞面目くさつて冗談にしてしまふ）おお、何たることろ邪惡なることよ。ねえ、ナット。まことに遺憾ながら君のお妹さんのことを、さう申しあげねばなりません。（一同、笑ふ。リリーでさへ微笑を禁じることができない。）

アーサー　（氣のきかないふざけ方で）ねえ、シッド叔父さん。今夜、叔父さん

とリリー叔母さんがベンチで寄りそつていちやつついてゐるところを、僕に見つかちないやうにしなくちやいけませんよ――でないと、僕、義務として巡査を呼ばなくちやなりませんからね。（シッドとリリーの二人は、この言葉で痛々しい位にきまり悪がり、冗談は面白くなくなつてしまふ。ただミルドレッドだけは、この二人の老人が戀を囁いてゐるのを想像すると、くすくす笑ひのこみあげてくるのを禁じることができない。）

ミラー夫人　（たしなめるやうに）アーサー！

ミラー　（無愛想に）お前はそれでいいだらうさ。エール邊でフットボールを蹴つてゐると、ユーモアのセンスが鈍くなるものと見える。結構な教育だよ。

ミラー夫人　（突然――どきつとしたやうに）だけど、リチァードはどうしたかしら？　あの子のことをすつかり忘れてゐたわ。一體、どこにゐるの？　朝御飯のあとでみんなと一しよにこの部屋へ來たものとばかり思つてゐたのに。

ミルドレッド　きつとどつかに一人でゐて、ミューリエル・マッコーマーに贈る

詩でも書いてゐるのよ、あのお馬鹿さんつたら。でなきや、書くふりをしてゐるのよ。誰かのを引き寫しにしてゐるだけさ。

アーサー　（食堂の方をふりかへつて見て）あいつ、まだ食堂にゐて、本を讀んでるぜ。（振りかへつて――嘲笑するやうに）ちえつ、あいつことんところ本ばかり讀んでやがる。休暇を愉快に過すのに、僕ならあんなことをするもんか。

ミラー　（辛辣に）お前には不思議に思へるかもしれないが、あれは學校の本を讀んでゐるんだよ。だからこそ、あれはクラスで首席になつたんだ。お前がニュー・ヘヴン（エール大學の所在地）を去るまでに、讀書は良き習慣なりといふことを教はるだけの時間のあるのを、お前のために希望するよ。

ミラー夫人　（鋭く）あッ、それで思ひ出しましたよ、ナット。わたしはね、リチァードの讀んでゐる恐ろしい本のことで、あなたにお話しようと思つてゐたんですの。あの子を十分叱つていただかなくちや――（椅子から立ちあがる）すぐ二階へ行つて持つて來ませう。洋服箪笥の棚にかくしてあるのを見つけたんです

よ。どういふ本だか、すぐお目にかけますから――（正面右手、表の客間をとほつて、せかせかした様子で出てゆく。）

ミラー　（明らかに、これから起らうとしてゐることを悦ばない様子で――シッドに不服さうにいふ）持ち出すのもいいがね、四日の記念祭の終るまで待つてくれたつてよかりさうなもんぢやないか――（それから、にやりとして）とにかく、騒ぎ立てるほどのことはありやしないよ。僕が子供の時分、こつそり隠れて讀んだ本のことを考へればだね。

シッド　僕もさう思ふね。デイックは、冒険物語の主人公ニック・カーターやコーリア大尉に夢中になつてゐるんだよ。

ミラー　いや、さういふ時代は、とつくの昔に過ぎ去つてゐるんだ。近頃あいつの夢中になつてゐるのは詩だよ――それも戀愛詩のやうだ――それに、時々恐ろしいことを言ひだすところをみると、社會主義も大分お氣に召してるやうだぜ。（それから元氣よく）まあ、どのみち、詮議しといた方がいいかもしれない。（呼

ぶ）リチァード。（返事がないので――聲を大きくして）リチァード。（返事がないので――今度は怒鳴り聲で）リチァード！

アーサー　（怒鳴る）おい、ディック、目を覺ませ！　お父さんが呼んでるよ。

リチァードの聲　（食堂から）はあい。唯今。

ミラー　困つた奴だ！　本に夢中になつたとなると、うちがひつくりかへつたつも、あいつ――

リチァードは讀んでゐた本を手にもち、讀みさしのところへ指をはさんで、奥の客間の戸から出てくる。彼は別の世界からいやいやながら地上へ呼びもどされたので、まだすこし吃驚したやうな表情をしてゐる。

彼は十七歳になるところで、丁度中學校（ハイスクール）を出たばかりである。外貌は完全に父親と母親との混合であつて、おたがひに相手に生寫しだと思ひこむほどである。母親の淡褐色の髪に、父親の灰色の目をしてゐる。その顔立ちは大きくも小さくもない。背たけは中位で、肥つても痩せてもゐない。美

少年といふわけにはゆかないが、さうかと言つて醜くもない。しかしまた、兩親のいづれとも全然違つてゐる。その上、何か極端に感受性の鋭いところがあつて――落ちつきのない、物おちした、挑戰的な、はにかみの、夢見がちの、自意識の強い知性が感じられる。その擧動には、單純卒直な少年になるかと思ふと、今度は勿體ぶつて役を演じる氣取つた俳優になるといつたところがある。服裝はアーサーのカレッヂ風のスタイルを反映した豫備校風のものである。

リチァード　パパ、何か御用？

ミラー　うん、ちよつとはつきりしておきたいことがあつたもんで。まあ、ここへ來て、すこし掛けたらどうだ。（自分の近くの、テーブルの右手の搖り椅子を指さす。）

リチァード　（進み出て――自分が心を奪はれてゐたことを御披露に及ぶ機會をつかまへ――偉ぶつた樣子で辯解するやうに）聞えなかつたんです、パパ。僕ね、

ほかの世界へ行つてたもんですから。（ミルドレッドが、こつそり足を突き出したので、それに躓いて、すんでのことに轉びさうになる。彼女はうれしさうに笑ふ。アーサーも笑ふ。）

アーサー　うまいぞ、ミッド。それで、あいつ目が覺めるだらう。

リチァード　（恥しさうににたりとして――今はすつかり少年になつて）やつたな、ミッド！　よし、やつつけてやるから。（彼女をソファに押しつけ、片手には本をもつたまま、空いてゐる方の手で彼女を擽る。彼女は悲鳴をあげる。）

アーサー　よう、ディック、うしうし！

ミラー　いいだらう、もう。あばれるのはその位にしておき。リチァード、お前はここへお坐り。（リチァードは柔順にテーブルの右手の椅子に父に向ひあつて掛ける）お前は今日はどうする計畫だね？　ミルドレッドと一しよに海岸に行くのかい？

リチァード　（馬鹿にしたやうに偉ぶつて）あんな馬鹿々々しい女の子の會なん

か！　誰が行くもんか！

ミルドレッド　ミューリエルがゐないから行かないんでせう。きつとどつかでの人と逢ふ約束がしてあんのよ。

リチァード　（恥しさうに顔を赤らめて）默れ！（それから、父に向つて）僕うちにゐようと思つてたんです、パパ――どのみち、朝のうちは。

ミラー　ちや、トミーの爆竹をならす手傳ひでもするか、ええ？

リチァード　（體を引き締め――勿體ぶつて）僕、そんなことする氣はありません。（それから、ひどくしかつめらしい顔をして）僕、七月四日のかういふ馬鹿げたお祝なんか信じません――自由だなんて嘘ばつかりついてゐるんです――自由なんてどこにもないのに！

ミラー　（目をしばたたいて）ふん！

リチァード　（熱して來て）自由なる者の國、勇ましき者の家だなんて！　むしろ奴隷の國と言つた方がましだ――資本家階級の踵の下に踏みにぢられた賃金奴

隷、食に飢え、子供たちのためにパンを求めて叫び、それで得るものといへば單なる石ころにすぎないんだ！　七月四日なんて馬鹿げたお茶番だ！

ミラー　（にたにた笑ひさうになるのを隱すために、口に手を當てて）ふん。そいつあなかなか意勢のいい言葉だなあ。だが、さういふ意見は家庭のなかだけにしといた方がいいぜ。でないと、監獄へぶちこまれるぞ。

シッド　そして、鍵を投げすてられて、永久に日の目が見られないつてわけか。

リチァード　（陰鬱に）監獄へぶちこむなら勝手にぶちこむがいいんだ。しかし、さうなると、憲法で保證されてゐる言論の自由はどうなるんだ。そいつもやつぱりお茶番つてことか。（それから陰氣につけ加へる）あなた方はあなた方の七月四日をお祝ひなさるがいいさ。僕は民衆が再び斷頭臺（ギロチン）を持ち出して、僞善者パイアポント・モーガン〔アメリカの銀行家〕を死刑囚護送車にのせて引つぱつてゆく日を祝つてやる！（父親とシッドは大いに面白がる。リリーは衝動をうけるが、兩人から合圖されて微笑する。ミルドレッドはこれまでかういふ特殊な言葉

をきいたことがないので、當惑したやうな驚きの表情で彼を見つめる。アーサー

だけが愛國者としての反撥を示し、憤激にたへないもののやうである。）

アーサー　おい、貴様、生意氣だぞ。ああいふ氣ちがひは外へ縛りつけてやるがいいんだ。四日の記念祭をさういふ風に言ふんなら、鼻つつらへぐわんと一くらはし、パンチをくれてやるぞ！

ミラー　（眞面目くさつて）おおい、お前が話してゐるんだつてことを知らなかつたら、お父さんはな、無政府主義者のエンマ・ゴルドマンと一しよにゐるのかと思ひちがひしたかもしれないぜ。

アーサー　御心配なく、お父さん。こいつをエールへ入れるまで待つて下さい。そういふ考を叩き出してやりますから。

リチァード　（ひどく輕蔑して）エールだつて！　兄さんはこの世界にエール以外なんにもないやうに思つてゐるんだ。しかし、エールなんて何さ、結局？

アーサー　今に何だか分るよ。

シッド　（けしかけるやうに）おい、ディック、嚇かされちゃ駄目だぜ。やつつけてやれ、やつつけて！

リリー　（衝動をうけて）まあ、シッド！　若い人の前でそんな、そんな亂暴な言葉を——

リチァード　リリー叔母さん、僕を何だと思ふんです——赤ん坊だとでも思ふんですか。僕は、シッド叔父さんの言ふよりももつとひどい言葉だつて聞いてゐるんです。

ミルドレッド　そして、自分でも、もつとひどいことを言つてるんだわ、きつと。

ミラー　（諦めの道化けた態度で）なあ、リチァード、お父さんはな、毎年、四日の記念祭となると、街頭演說をすくなくとも一つはきかざるをえないめぐり合せになつてゐたんだがね。今日はお前が朝飯のすぐあとで特別景氣のいい奴をやつてくれたんで、今日一日これで厄拂ひになつてもらひたいもんだと希望するねえ。（これをきつかけとして、今度はみんなが笑ひ出す。）

リチァード　（陰欝に）結構です。笑つて下さい。ルイ十五世の言葉ではないが、「死後に大洪水きたる」位に思つていらつしやんでせう。しかし、お氣をつけなさい。そいつが生きてるうちに來たとしたら？　世界の勞働者が團結して蹶起しちや、なぜいけないわけがあるんです。あいつらには、おのれを縛つてゐる鎖以外に失ふべき何ものもないんだ。（威嚇するやうに暗誦する）「おお、バビロンよ、日は一日々々と暑くなる。しかし、汝が柳の木かげは涼し。」

ミラー　ふむ。惡くないなあ。だが、嚴密に言つて、どこに關係があるんだね？お前の讀んでるその本にでもあるのかい？

リチァード　（偉ぶつて）いいえ。今のは詩です。これは散文です。

ミラー　詩と散文には區別があつたつけな。その本は何だね？

リチァード　（得意さうに）カーライルの「フランス革命」です。

ミラー　ふむ。そのせいだな、お前が死刑囚護送車を索き出したり、可哀さうなバイアポント老人をそれに乘つけたりしたのは。（それから眞面目に）リチァード、お前がそれを讀んでるのは、大いに氣にいつたよ。それは全くいい本だ。

リチァード　（お世辭でない驚きをもつて）ええ、お父さん讀んだことがあるんですか。

ミラー　そりやあるさ。新聞社の社長だつて絶えず本を讀まないわけにはゆかないんだよ。

リチァード　（顏を赤めて）僕――僕、そんなつもりで言つたんぢやないんです――そりやお父さんだつて――（熱心に）ねえ、これは立派な本でせう――ミラーボーのことを書いた部分とか――マラーやロベスピエールの個所とか――

ミラー夫人　（ひどく困惑して昂奮した樣子で、表の客間から出てくる）ロベスピエールのことなんかどうでもいいよ。さあ、本をどこへ隱したかすぐにお話し！　お前の洋服箪笥の棚においてあつたのに、どつかへ隱してしまつたのね。すぐ二階へ行つて、お父さんのところへ持つておいで。（リチァードは急にうしろめたい、押しひしがれたやうな樣子になる。しかし、それはほんの一瞬間で、

すぐに氣色ばんで身を守らうとする。）

ミラー　（彼の方へ、分つてゐるよと言はんばかりの目差しをちらと向けてから）何も今持つてこさせなくともいいぢやないか。いまいましい本のことで、朝の時間がすつかりふいになつてしまふよ。とにかくリチァードにしたつて自分の圖書室をもつ權利はあるからなあ――つまり、それがあんまり過激でなければだ――どういふ本なんだい、リチァード？

リチァード　（きまり悪るさうに）さうですね――例へば――

ミラー夫人　この子が言ひたくなければ、わたしが話します――あなたからよく言ひきかせてやつて下さい。（それからリチァードの方をちらと見て、調子を柔らげて）わたしは何もリチァードを咎め立てしようといふんぢやありませんよ。きつとこの子の友だちに、自分の方がませてゐて惡人だといふことを見せびらかしたいのがゐるんです。だから、その子の入れ智慧で――

リチァード　違ひます！　新聞や他の本に出てゐたのを讀んで、自分で知つたんです。

ミラー夫人　それはまあ、どうだつてようございますが、とにかく本は棚の上にありましたからね。二冊は監獄へ入れられたあの恐ろしいオスカー・ワイルドのものでした。どういふ罪を犯したか神様だけが御存知です。

アーサー　（突然――眞面目くさつた嚴然たる態度で）ワイルドは二重結婚の罪を犯したんだ。（シッドが下品な笑ひの思はず噴き出しさうになるのを押へてゐるのを見て）何が可笑しいんです。僕の言ふこと間違つてゐますか。大學の友人が話してくれたんです。そいつの親父さんつてのは、ワイルドが監禁された時に英國にゐたんですが――お母さんがお父さんに事情をきいたら、二重結婚の罪を犯したんだと話してゐたのを、ちやんと記憶してゐると言つてゐました。

ミラー　（片手で笑ひをかくしながら）それなら、さうに違ひないよ、アーサー。

ミラー夫人　わたしはね、うやむやにしてしまふのはいやですよ。何だつてはつきりしとかなくちや。一冊は何とかの繪姿つていふんでした。

リチァード　ドリアン・グレーの繪姿。今までに出た一番立派な小説のひとつです。

ミラー夫人　わたしには安つぽいがらくた本のやうに思へたけど。もう一冊は詩集でした。名前は忘れたけれど何とかの歌。

リチァード　レッディング監獄の歌。今までに出た一番立派な詩集のひとつです。

ミラー夫人　お母さんの讀んで分つたところでは、奥さんを殺して絞り首になつた人のことばかりぢやないの。そりや絞り首になるのは當然でせうけど。それから、あのバーナード・ショーの書いた本が二冊。

リチァード　現在生きてゐる一番偉大な戯曲家です！

ミラー夫人　この子に言はしたらさうかもしれないわね。ねえ、ナット、あのお芝居を書いた人ですよ――ほら、何でしたつけ――まあ、何でもいいけど、内容があんまりひどいんで、ニューヨークで上演許可がおりなかつたことがあつたでせう。

ミラー　ふむ。さういふことがあつたな。

ミラー夫人　一冊はお芝居でしたが、もう一冊は何ともわけのわからない長つたらしい題の本でしたよ。お芝居でないことはたしかですが。

リチァード　（誇らしげに）イプセニズムの精髄。

ミルドレッド　へえ！　何て名前なのさ！　どういふ意味なの、ディック？　きつと自分でも分らないんでせう。

リチ　ード　（憤慨して）知つてるよ、それつくらゐ！　シェイクスピア以來の最も偉大な戯曲家イプセンについて書いたもんだよ。

ミラー夫人　さうさう、そのイプセンの書いたお芝居の本も一冊ありましたよ。それから、スウイン何とかいふ人の詩集――

リチァード　スウィンバーンの詩と小唄ですよ、ママ。シェリー以來の最大の詩人です。この詩人たるや本當の戀愛についての眞實を語つてゐるんです。

ミラー夫人　戀愛！　お母さんがところどころ拾ひ讀みしたところでは、もしそ

の人が牢屋へぶちこまれなかつたとしたら、當然入れられていい人ですよ。お母さんにはつきりさう言へますねえ。だつて、とても讀むにたへないやうなところがあるんですもの。あんまり淫らがましくて――あんなもの――リリーやミルドレッドの前では恥しくて口に出せませんよ。

シッド　（リチァードの方へ目配せして――ふざけるやうに）おい、ディック、さすがの叔父さんも、そいつにはかなはないやうだ。叔父さんもすこし詩の教育をうける必要があるぞ。

リリー　（恥しい思ひをさせられたが、笑ひながら）シッド！　恥しくないの？

ミラー夫人　これは笑ひごとぢやありませんよ。それからキプリングのものがありましたが――これはさう悪かないと思ひますね。それから最後に詩集が一冊――長い名前で――何でもルバイ――何だつたけね、リチァード？

リチァード　オーマー・カイヤムのルバイヤット。全部の中で一番いい詩です。

ミラー　ああ、これならおれも讀んだことがあるぜ、エシー――社に一部おいてあるよ。

シッド　（熱心に）僕も讀んだことがある。そいつあ最高品だ。

リリー　（羞かみがちに昂奮して）わたし――わたしも讀んだことがありますわ――圖書館で。とても好きな詩がまざつてゐますわ。

ミラー夫人　（氣を悪くして）まあ、リリー！

ミラー　してみると、みんなが讀んだことになるな、エシー――しかも、誰ひとりそのために害をうけたものもゐさうぢやないぢやないか。あの詩には立派なことが書かれてゐる――實のことが――僕にはさう思へるね。

ミラー夫人　（今やいささか狼狽しあやふやになつて）だつて、ナット、あなたまでがそんな風におつしやるなんて――わたしには恐しい罰當りな詩に思へたんですがね――わたしも一部分讀みましたが。

シッド　かういふのがあつたつけ。（言葉の綾に引用する）「おお、汝よ、われさまよひいるべき道を、陷穽と罠もてさまたげ――」ああ、僕の行くべき道も、過

きし日をかへりみれば、酒なる罠をもつていかにさまたげられてゐたかを常に感ぜずにはゐられないよ――ねえ、さうだらう？（リリーの方へおどけた横目を投げる。他の者笑ふ。しかし、リリーは憂鬱な夢想に耽つてゐて、この言葉を聞いてゐない。）

ミラー夫人　（辛辣に――しかし彼のこととなるといつも笑ひを誘はれるのを我慢してゐるのは明かである）あなたつたら、お酒のことを書いた詩ばかり拾ひだしてゐるんでせう！

リリー　（突然――悲哀の感動をこめて、もちもちしながら、恥しさうに引用する）これ、わたしの好きな詩――眞實なんですもの。

指は動きては書き、書きては
動く。汝がすべての信仰も智慧も
一行の半ばだに呼びかへし消すをえず、
汝が涙とてそのひと言をだに洗ひ去りえじ。

ミラー夫人　（他の者と同じやうに吃驚して）まあ、リリー、あなたが詩を朗讀するなんて、はじめてのことだわ！

リリー　（すぐにうしろめたい様子で辯解するやうに）だつてね――これ、どういふわけだか、頭にこびりついてゐたんですのよ。

リチャード　（リリー叔母を今までに見たことがなかつたかのやうに眺めて）すてきでしたよ、リリー叔母さん！（それから熱心に）だけど、今のは一番いい詩ぢやありませんよ。一番いいのはね。

とこ木陰には、ひと巻の詩集
ひと壺の酒、ひとかたまりのパン――そして御身の
わがかたはらにありて荒野に歌へば――

アーサー　（かうした詩の引用にすつかりうんざりしてしまつて、右手、机の奥寄りの窓のところへ、ぶらぶら歩いて行つてゐたが）おう！　誰か歩道のところをやつてくるよ――ああ、マッコーマーの親爺だ！

ミラー　（いらいらして）デーヴが來た？　一體全體、あいつ今ごろ何だつて——おい、シッド、例の園遊會はどうやらお流れになりさうだぜ。

ミラー夫人　（腹立たしさうに）こんなに朝早いから、わたしたちのうちにゐるのを知つてゐるでせうし。嘘もつけずさ。（それから、別のことを考へてひやりとする）あのノーラつたら——ほんとに頓馬だから、わたしが一々教へてやらなきや、玄關先でちやんとしたお取次ひとつできないんだから。ナット、あなたはデーヴに會つて下さらなくちやいけませんよ。ノーラにここへ案内させまずから。リリー、あなたは裏の階段から二階へあがつて、身支度をして頂戴。わたしもすぐ二階へ行きますから。ナット、できるだけ早くあの人を追ひ拂つて頂戴よ。一體、何の用だか分らないけど——（彼女とリリーは奥の客間を通つて急いで出てゆく。）

アーサー　僕も逃げ出さうつと——八時二十分の市内電車に乘るには丁度いい時間だ。

ミルドレッド　あたしもそれに乘らなくちや。帽子取つてくるから、ちよつと待つてて、アート！（奥の客間の方へ驅けてゆく。）

アーサー　（そのうしろから叫ぶ）待てないよ。急いでくれば、追つつけるよ。（奥の客間の戸口のところで振りむいて——にたりとして）おい、ディック、マッコーマーの來たのはな、あいつの娘にたいするお前の結婚申込みが不名譽なものでないかどうか探りにきたのかもしれないぜ。足元の明るいうちに逃げた方がいいよ。（笑ひながら奥の客間をとほつて去る。）

リチャード　（すこしどきつとするが、平気らしい樣子を裝うて）あいつを怖がつてゐると思ふのか？

ミラー　（ぢつと彼を見詰めながら——顏をしかめて）何の用件か想像がつかないが——何か文句を言ひにきたことはたしかだ。いや全くああいふ老いぼれの馬鹿とは親しくすべきぢやなかつたよ——しかし、何しろ社としては一番大切な廣告主だといつていい位なんでなあ。

シッド　（同情するやうに）そりやさうだよ。だが、とにかく追つぱらつてしまふこつたな。奴の方が君よりもあの廣告を遙かに必要としてゐるんだぜ。

ベルの音が、この家のうしろの方、奥の客間のずつと左手から聞えてくる。

ミラー　そら來たぞ。デイック、お前は座を外しておいで――しかし、マッコーマーが歸つたら、すぐに戻つてくるんだよ。いいか。お前との話はまだすんでゐないんだから。

リチァード　はい。

ミラー　シッド、君もゐない方がいいやうだな。だつて、デーヴの奴、冗談が嫌ひだらう。

シッド　そして、僕を蛇蝎の如くお好みあそばすか！　おい、ディック、外へ出て、トミーのお祭の手傳ひでもしようぜ。（彼はリチァードの腕をとり、二人は奥の客間をとほつて姿を消す。ミラーは表の客間をとほして玄關口へ目をやり、それから努めて愛想のいい調子で呼ぶ。）

ミラー　よう、デーヴ。さあさあ、ずつとこつちへ。どうだい、形勢は？　この光榮ある四日の記念日に君のまはりには順風吹きまくるの感ありだね。

單調な調子の弱々しい聲が「お早よう」と答へる。とすぐにデーヴィド・マッコーマーが表の客間の戸口へ姿をみせる。彼は痩せて干からびたやうな小男で、體にくらべて大きすぎる頭は細い頸の上にのつかり――深く窪んだ小さな黑い目と、團子のやうな不恰好な鼻と、小さく細長い切目のやうな口とのある顏は、長くてしかつめらしい馬面である。ミラーとはほぼ同年輩であるが、すつかり禿げてゐて、十歳も老けて見える。着古してピカピカ光る黑の洋服をいやにきちんと着こんでゐる。

ミラー　さあさあ、どうか椅子にかけて、おらくになすつて。（葉卷の箱を取り出して）葉卷はいかが？

マッコーマー　（テーブルの右手の椅子にかけながら――意地惡く）お忘れですな。手前は煙草をいただきません。

ミラー　（無理に自分を笑つて）さうさう。うつかりしてゐました。ちや、わたしひとりでいただきますかな。（これがマッコーマーの頭であつてくれたらよかちうにとばかり、葉巻の先を憎々しげに嚙みきつて、それから彼に向き合つて掛ける。）

マッコーマー　あなたは何の用で手前がここへ參つたかとお考へなさいますでせう。ですから、單刀直入に申しあげることにいたしませう。遺憾ながら、あまり面白からぬお話でして――と申すより不名譽と言つた方が或ひは眞實に近いかも存じません――しかも、その事柄たるや御子息のリチァード君に關係のあることでしてな。

ミラー　（氣色ばんでゐたが――おだやかに）まあまあ、デーヴ、リチァードにかぎつて、そんな――

マッコーマー　（鋭く）いや、たしかに斷言できますことで。まさかあなたは手前を嘘つきだと仰しやるんぢやありますまいな。

ミラー　誰も嘘つきだなどと、そんな話はしてをりません。わたしはただあなたのお考がたしかに間違つてゐると申すつもりでして。

マッコーマー　いや、間違つてをりません。御子息自身の書かれた動かぬ證據をもつてをります。

ミラー　（鋭く）問題の中心にふれようぢやありませんか。一體伴にどういふ雛があると仰しやるんですか。

マッコーマー　ふしだらな、神を瀆すなさり方です――手前の娘のミューリエルを故意に墮落させようとなさるのです。

ミラー　それなら、殘念ながら、あなたを嘘つきだと申しあげねばなりますまい。

マッコーマー　（腹を立てるでもなく――相變らず單調な弱々しい聲で）その點でさだめしあなたが言ひのがれをなさるだらうと思ひましたので、證據の品をすこしばかり持つて參じました。宅のほうにはまだまだいくらもございます。（上着の内かくしから紙入を取りだし、五六枚の紙片を選りぬいて、それをミラーに

さし出す）これはいい見本ですから、殘してきた分もお察しがつきませう。家内が娘の化粧箪笥の一つから、下着類の下にかくしてあるのを見つけたのです、これは全部御子息の手になるものでして、あなたもまさかさうではないなどと仰しやれますまい。いづれにしろ、娘がさうだと白狀してをりますことですから。これをお讀みになつて、その上で手前を嘘つきだと仰しやるがよろしいでせう。

（ミラーは紙片を手にとつて、顏をしかめながら讀んでゐる。マッコーマーは話しつづける）これは紛れもなくあなたが御多忙すぎたために、リチァード君の教育の方法とか讀書の選擇とかについて適當な配慮をなさるおひまがなかつたからのことでせう――それにしても、母親たるものがなぜ氣を配らなかつたのか、そこのところがどうも手前には理解しかねますんで。しかし、これはあなた方の御不幸であつて、手前の知つたことではござんせん。ですが、ミューリエルのことになれば、これは手前の問題ですから、娘の純潔さを若い男の汚れに曝されるままにしておくことは、手前の忍びないところであり、また、さうさせたくもござ

んせん。その若い男の心情たるや、讀んでゐるものから判斷すれば、いやもう腐りはてて――

ミラー　（怒氣をおさへるのに非常な努力をしながら）なにを馬鹿な！　リチァードはあらゆる權威に反抗したくてたまらない年頃の、ほんの子供にすぎないのがお分りにならないんですか。あいつは過激なものなら何でも手當り次第に讀んで、それを年上の者とか女や男の友だちとかに次々に廻して、自分がいかに若いやくざ者だかを見せびらかしてみたくてたまらないんだ。なに、あなただつて、心では、リチァードもお宅のミューリエルさんと同じやうに罪のない大きな赤ん坊だ位のことはお分りでせうに！（彼は侮蔑するやうに紙片をテーブル越しに押しやつて）こんな下らぬものは、わたしにとつて何の意味もありません。つまり、あなたがお考へになつてゐるやうなものではないといふことです。こんなものでミューリエルさんが墮落するとお信じになるなら、お孃さんはきはめて安々と墮落するものとお信じになつてゐるも同然です。しかし、請け合つておきますが、お

嬢さんはあなたがお考へになつてゐる以上に世間について遙かに多くのことを御存知でせう。鵠がお前を煙突から投げとんで行つたのだなどと言つても本當にはなさいますまいよ。

マッコーマー　今度はあなたは娘を侮辱なさる。手前、斷じて忘れませんぞ。

ミラー　侮辱なんぞ致すもんですか。ミューリエルさんは全くいい娘さんだと思つてをります。それといふのも、健全な常識を備へてゐられるものと御信用申してゐればこそです。うちの娘のミルドレッドも同い年になりますが、やつぱり同じやうに申していいかと存じます。

マッコーマー　お宅のミルドレッドさんのことは、どこへ行つてもお轉婆だといふ噂をきくだけで、その外のことは手前存じてをりません。（一層鋭い調子になつて）なるほど、あなたはさぞかし強情をお張んなさるだらうと思つてゐましたが、現にこれを讀んでゐながら、それでもなほ御子息は清淨無垢で何ら悪いことをしてゐないなどと言ひ張るなんて、あなたをそんな頑々しい方だとは、いや全

く夢にも思ひませんでしたよ。

ミラー　では、わたしがどうするだらうとお思ひでした？

マッコーマー　他人の子供を守るといふ市民として當然なすべきあなたの明白な義務を遂行していただきたいものです。御子息が終生忘れることのできないほど鞭でひつぱたいておやりなさるがいい。あなたにいささかでも分別といふものがおありなら、御子息のためにさうなさるのが當然です——監獄で一生を終らせたくないとお考へなさるならば。

ミラー　（拳を握り、テーブル越しに乘りだして）おい、デーヴ、我慢できるかぎり我慢してゐたんだぞ。出てゆけ！　すぐ出てゆかないと、いやでも出てゆくやうに背中を蹴つとばしてくれるから！

マッコーマー　（のろのろ立ちあがりながら、又しても單調な弱々しい聲で）なにもさう癇癪起すには當りますまいよ。手前の方でも既に義務を遂行したのですから、あなたの方でもあなたの義務を果してほしいと、さう要求してゐるだけなん

だ。手前はミューリエルを罰してをります。向う一ケ月外出を禁じ、夜は八時きつかりに床につかせるやうにしてをりますよ。しかも、ミューリエルの方には落度がなく、批難すべきものはむしろ――

ミラー　おい、もうたくさんだと言つてるぢやないか！（威嚇するやうな身振りをする。）

マッコーマー　まあまあ、手を振りあげなくともよろしいでせう。歸ります。ですが、もう一つだけ。（紙入から一通の手紙を取り出す）これはミューリエルの手紙で御子息宛のものです。（それをテーブルの上におく）娘もすつかり目がさめたので、御子息のことをどう思ふやうになつたか、この手紙ではつきりいたすことでせう。御子息も手紙の内容についてとくと御注意ねがひたいと存じます――御子息のためにもあなたのためにもですな――と申すのは、御子息が又しても手前の家のまはりをうろうろなさるやうなことがあれば、早速その筋の者に引きわたす所存でをりますでな。それにまた、手前もあなたからいろいろと侮辱を

いただきましたが、そのお返しをいたさないなどとお考へなさいませんやうに。手前の店の廣告はあなたの新聞から引つこめることにいたしませう――そしてですな、あなたが書面で謝罪し、御子息に罰を加へるとお約束なさいません以上は、將來とも廣告はきつぱりお斷りいたします。

ミラー　何とでも勝手にするがいい。貴様のいまいましい廣告なんぞ、引つこめるなり何なり勝手にするがいいんだ！

マッコーマー　見えすいた威し文句を仰しやいますね。あの廣告があなたにとつてどんなに必要だか御自分でよく御存知のくせに。手前にはそれがよく分つてをりますでな。（體をこはばらせながら戸口の方へゆく。）

ミラー　おい！　ちよつと話がある！　今度は君の威し文句にお答へしよう。君が今の決心を飜へさうと飜へすまいと、君のいまいましい廣告は明日以後斷然お斷りいたしませう。そんなものはパイプにでも詰めて煙にしてしまふがいいんだ！　それどころか、わたしは戰鬪を開始して、いいですか、外部の資本を動か

し、お宅の店に對抗してちやんとした呉服店を開かせ、お宅の店がいかに世間をたぶらかしてゐる詐欺であるかをはつきりさせてやりますぞ！

マッコーマー　（この威嚇にいささかたぢろいで――しかし相變らず單調な調子で）あなたを名譽毀損で訴へませう。

ミラー　わたしがこれをやりとげた暁には、この町には君の店で布巾一枚買ふものもゐなくなるだらうよ！

マッコーマー　（一層たぢたぢとなつて、相手から視線をそらしてきよろきよろしながら）すつかり威し文句だ。よもやあなたは、そんな――（とうとあやふやな調子で言ふ）ちや、これで失禮を。（ふりかへつて出てゆく。ナットは彼を見送りながら立つてゐる。怒りの表情は次第に消えて、すこしうんざりした不快さうな樣子が殘つてゐる。シッドが奥の客間から出てくる。彼は右手の火傷をおさへてゐるが、顔には滿足さうなにやにやした笑ひが浮んでゐる。）

シッド　トミーのいまいましい爆竹で火傷しちやつたんで、ワセリンを取りに來

たんだがね。喧嘩のおしまひのところを聞いちやつたよ。やつたなあ、ナット。

ミラー　奴さんをこつぴどくやつつけてやつたぢやないか。

ミラー　（憂鬱に）大したきき目があつたらうよ。あいつ、口先ばかりの話だつてことを見拔いてゐるよ。

シッド　いや、奴にそれが見拔けるもんか、ナット。なにせ、あのけちんぼ親爺、脛に傷もつ身だからな。

ミラー　だが、僕を知つてるほどの者なら、僕がさういふ面當てがましい下劣な手段のために自分の新聞を利用しない男だぐらゐのことは知つてゐるよ――たとへ相手がどんなことをしたにせよだ。

シッド　さうさ、君がお人好しだつてことは誰だつて知つてるよ、ナット。おのれの利益のためには、きはめて謹嚴だつてことをな。しかしだね、マッコーマーはさういふ君といふものをまだ見たことがないんだ。だから、すつかり度膽をぬかれてゐるぜ、度膽を。（くつくつ笑ふ。）

ミラー　（相變らず氣の重い樣子で）どうして僕がかう向つ腹を立てたのか、我ながらわけが分らないよ。マッコーマーのやうな鼬鼠野郎は、ものの十分間も一しよにゐると、こつちまでたちまち大鼬鼠になつちまふもんとみえるよ。

シッド　（テーブルの上の紙片に氣がついて）これは何だい？　奴さん持つてきたのか？（取りあげて讀みはじめる。）

ミラー　（陰氣に）新しき自由の見本さ――エシーが見つけた本から書き拔いたんだらう――リチァードの奴、ミューリエルを教育するつもりで渡したんだ。そいつがつまり騷動のもとつてわけさ。（顏をしかめて）あの若いアナーキストを何とかしなくちやなるまい。さもないと、親子諸共、幾多の面倒にまきこまれないもんでもないからな。（感傷的にたよりなささうに）だが、一體僕に何ができるといふんだ。馬銜をかませて縛りつけてみたところで、あいつをますます以て惡くするだけだ。奴にすれば、反抗するに足る苛酷な暴君ができたわけだからな。あいつはさういふことが好きなんだ、あいつは！

シッド　（にたにた笑ひながら紙片を讀んでゐたが――突然、唇を鳴らす）ヒュッ！　いやどうも、こいつは熱烈な代物だぞ、全く！（わざとふざけて力をいれながら朗讀する）

わがいのち、君ゆゑに傷む。君が目
われを盲となし、君が髮われを燒き、
君が鋭き吐息、柔かき響もて、わが肉と心を二つにわかつ。

ミラー　（陰氣な微笑をみせて）ふむ！　そいつあ見落してゐたぞ。きつとスウィンバーンの寫しだらう。僕はまだスウィンバーンを讀んだことがないが、何でもさういつたことを書く詩人だつてことは聞いてるよ。

シッド　さうだよ、ちやんとスウィンバーンの「アナクトリア」つてレッテルがついてらあ。たしかに間違ひなしだ。おつと待つたり！　こりやどうだ。まだどえらいのが控えてゐるぞ。（さらに滑稽な調子をつよめて朗讀する）

酒のごと君が血を啜り、

蜜のごと君が胸をくらひ、
頭より足にいたる君が體のすべてをわがものとし、
ああ、君が體をわが體に埋め參らすをえば！

ミラー　（抑へきれない子供っぽい笑ひがその顏に浮んでくる）とりやたまらん！　あのデーヴ老人が生れてはじめてかういふものを讀みこなしてゐるところを想像してみろよ。あいつの顏が見られるものなら、どんなことだってしたんだがな。（それから、ざくりとして批難するやうな調子が、その聲に現はれる）しかし、これは冗談事ぢやないぞ。熱烈すぎるよ——全く、熱烈も熱烈、度をすごしてゐる。僕はかういふのは好かんなあ、シッド。これは、たしなみのある娘におくるべき代物では斷じてないよ。（一層當惑して）僕はね、リチァードの奴、心からあの娘に惚れてゐるんだと思ってゐたんだ——ああいふ年頃の子供が、身持のいい娘に戀するやうにさ——月の光だとか、手を握りあふとか、時々キスするとかさ。だが、これでみると——あいつ、何かものにしようといふ魂膽で、娘

のあとを追ひまはしてゐるんぢやないかって氣がするよ。（怒って）畜生、もしさうだとしたら、奴を當然鞭でひっぱたいてやっていいんだ——マッコーマーの奴、さうするのが僕の義務だと言ひあがったが。とにかく、何とかきまりをつけなくちやなるまい。

シッド　そりやさうだ。さうすりや、あの子もたしなみのある娘を困らせるやうなことはしなくなるだらう。

ミラー　ただ僕にできることといったら、あれにちやんと教へてやる位のとこだがね。（誇らしげに）リチァードって奴は、どんなことであれ、堂々と立ち向って決して逃げかくれするやうな卑怯な眞似はしないよ。僕に一度だって嘘をついたことのない子だからね。

シッド　（奥の客間で何か音がしたので、その方を見て——囁き聲で）おい、今が丁度いい機會だ。君を一人きりにして、僕は退却するとしよう——二階で御婦人がたの支度ができたか見てくるからね。もし本當に例の園遊會へ行くんだった

ら――すぐ出かけた方がいいぜ。（表の客間へ半ば行きかけた時、奥の客間から
リチァードが出てくる。明らかにマッコーマーの訪問をひどく氣にしてゐる様子
である。）

リチァード　（强ひて無邪氣な調子を裝って）手、どうですか、シッド叔父さん？

シッド　大大夫だよ、ディック。有難う――ちよっと痛むだけだ。（出てゆく。
ミラーは顏をしかめて息子を見つめる。リチァードはちらと横目で父を見て、一
層自己の罪を意識してくる。）

リチァード　（無理にくすくす笑ひながら）ねえ、パパ、シッド叔父さんたらト
ミーよりも大きな赤ん坊なんですからね。爆竹を空中へ投げあげて、落ちてくる
のを手の甲で受けとめ、爆發しようとする瞬間また投げあげるんですがね――
その一つが落ちてきたとき、叔父さんたら素早くやらないもんだから、丁度手の
上でパアンと爆發しちやつたんですよ――

ミラー　そんなことはどうでもよろしい。爆竹以外のことで、お前に話さなきや

ならんことがあるんだ。

リチァード　（心配さうに）何ですか、パパ？

ミラー　（突然、兩手を息子の肩にかけ――靜かに）なあ、リチァード。お前に
ひとつききたいことがあるんだが、正直に答へてもらひたいんだ。前以て斷つて
おくがね、その答がイエスであれば、お父さんはお前を罰するつもりだ。それも
嚴しく罰するつもりだ。お父さんの子供として、してはならないことをしたこと
になるからだ。しかし、お前はこれまで嘘をついたことのないのをお父さんは知
つてゐるから、今だつて罰を逃れたいために嘘をつくやうなことはあるまいと信
じてゐるんだが、どうだ。

リチァード　（感動して――勿體ぶつて）嘘なんてつきません、パパ。

ミラー　お前はミューリエルにどうかしようとしたことがあるか――してはなら
ないことをだよ――お父さんの言ふ意味はわかるね？

リチァード　（理解できないかのやうに、一瞬間父を見つめる――それから、思

ひあたつて、かつとなつた憤怒の色がその顏にあらはれる）そんなことを！　僕をどういふ人間だと思つてゐるんです、パパ？　僕、そんなことするもんですか！　あの人はそんな女ぢやありません！　だつて、僕――僕、あの人を愛してゐるんです！　僕、結婚するつもりです――カレッヂを卒業したら！　あの人もそのつもりだと言ひました！　僕たち、結婚の約束をしたんです！

ミラー　（すつかり安心して）よろしい。それがお父さんの知りたいと思つたことの全部だ。この話はもうこれで打ち切りにしよう。（滿足さうに息子の背中を輕くたたく。）

リチァード　僕、お父さんがどうしてそんなことお考へになつたのか分りません――あのマッコーマーの馬鹿親爺が僕のことをそんな風に言つたんですか。

ミラー　（今は冗談の口調になつて）おいおい、お前の未來の舅をそんな風に惡くいふ奴があるか。義理にも、尊敬した口のきき方とはいへんぞ。（リチァードの怒つた顏をちらと見てから――テーブルの上の紙片を指さす）お前がマッコー

マーの純潔な娘さんに御紹介に及んだその文學だがね、お前がそれに目をとほしてみて、それでもなほデーヴ老人を批難することができるかね。どうだ、できまいが。

リチァード　（はじめて紙片をみて、當惑で壓倒されんばかりになつたが、すぐに偉ぶつた無關心さで、それを掩ひかくさうとする）だからなんですね。親爺さん、これを見つけたんですね？　あの人に注意するようにと言つといたのに。――だけど、そのためにあの親爺さんも一度は人生の眞實といふものを知つて、あの頑迷固陋な考へから脫けだすことができれば、こんないいことはないぢやありませんか。

ミラー　ところがだ、さういふものは若い娘さんが讀むには不適當だといふ點では、殘念ながらあの御老人に同意せざるをえないねえ。（それから機敏に持ちあげて）さういふものは、お前のやうに一人前の男には、それ相應に惡くはないさ。そりやさうさ。しかしだね――今言つたことをとくと考へてみて、お父さん

に同意できないものかどうか考へてごらん。

リチァード　（まごまごして）僕、ただこれが好きだつたもんだから、こんなことしたんです――僕、あの人に、あるがままの人生にぶつかつてもらひたかつたんです。ミューリエルつたら馬鹿々々しいくらゐ人生を怖がつてゐるんです――親爺さんを怖がり――世間の人が自分のことをああ言つたかう言つたと怖がり――戀をするのを怖がり――あらゆることを怖がつてゐるんです。僕に接吻させることさへ怖がつてゐるんです。だから、僕、思つたんです、多分かういふものを讀だから――これ、美しい詩でせう、ねえ、さうぢやありませんか、パパ――さうしたら、あの人、自分自身の生活といふものを送る勇氣が出てきて、始終怖がつてばかりゐないですむんぢやないかと、さう思うたんです。

ミラー　なるほど。だけど、それでもやつぱりあの人は怖がつてゐるんぢやないかと思ふね。（テーブルから手紙を取り上げて）これはあの人からの手紙で、親爺さんがお前にわたしてくれと言つて持つて來たんだ。（リチァードは不安さう

な表情になつて、そわそわしながら手紙を受けとる。ミラーは溫情のこもつた微笑をして、つけ加へる）お前にはすこしばかり打擊かもしれんが、その覺悟をした方がいいよ。なあに、氣にするこたあないさ。海にはほかに魚がどつさりゐるよ。（リチァードには父の言葉が耳にはいらない。一種魅せられたやうな恐怖をもつて手紙を凝視してゐる。ミラーはしばらく息子の顏を眺めてゐたが、心配と當惑でわきを向いてしまふ）困つたもんだ。こりや二階へ行つて、身支度した方がいいやうだ。さもないと、園遊會へ行きそびれてしまふ。（ぎごちなく、間の惡るさうな樣子で、表の客間をとほつて出てゆく。リチァードはなほもしばらく手紙を凝視してゐたが――やがて勇氣を振ひおこし、手紙の封をきり、字づらの上を走るやうに讀みはじめる。讀むにつれて、その顏は次第々々に痛々しく悲劇的になり、終に唇の端をへしまげて、今にも泣き出さんばかりの樣子になる。彼はやつとの思ひで唇の形をもと通りにしたものの、屈辱と不當に扱はれた怒とで、顏が火のやうにほてつてゐる。）

リチァード　（突然ひとりで怒鳴る）卑怯者！　憎んでやるぞ！　僕をこんな目に會はすなんて不當だ！　よし！　思ひ知らせてやるから！（表の客間に話し聲がしたので、彼はすばやく手紙を上着のポケットへ押しこみ、冷靜で平氣さうな様子に見せようと全力をつくし、「教會で待って」を口笛で吹かうとさへする。しかし、母親、リリー、シッドが表の客間からはいつてきたので、口笛は無殘にもかすれて消える。彼らはその時代のドライヴにさいしての念入りな身支度ですつかり服裝をととのへてゐる――リンネンの塵除け外套、ヴェール、塵除け目鏡。シッドは、いきな鳥打帽をかぶつてゐる。）

ミラー夫人　やれやれ、やつとこれで出かけるばかりになつた。もうこれ以上訪問客など來ませんやうに。マッコーマーは何の用で來たの、リチァード。お前知つてゐるでせう。シッド叔父さんはわたしたちには話さうとなさらないんだよ。

リチァード　僕のこと、自分で詮索したらいいぢやないの。パパにきいてごらん。

ミラー夫人　（すぐに彼の様子にどつか意氣銷沈したところのあるのに氣がつい

て――心配さうにそばへ寄る）まあ。どうしたのさ、一體？　まるで最後のお友だちに死なれでもしたやうな様子ぢやないの。どうしたのよ！

リチァード　（絶望的に）僕――僕、氣分がよくないんだ――お腹をこわしたんだ。

ミラー夫人　（すぐにすつかり同情して――額の毛をうしろへ撫でてやりながら）まあ、可哀さうに。何て間が悪いんだらうね――選りに選つて四日の記念日に病氣になるなんて。（他の人たちの方へふりむいて）この子が病氣なら、わたしはうちに殘つてそばにゐてやつた方がいいやうですわ。

リリー　ぢや、わたしも殘りますわ。

リチァード　（一層絶望的に）よして！　ママ、行つてよ！　僕、本當は病氣ぢやないんだ！　すぐよくなるよ！　行つてよ！　僕、ひとりでゐたいんだ！

（その時、トミーが大砲花火を仕掛けたので、一段と大きい音が裏の方からきこえてくる。リチァードは飛びあがる）トミーの馬鹿！　花火の馬鹿！　あのいま

いましいちびがそこらにゐる間は、うちん中の靜かになることがありやしない。とにかく、馬鹿な話さ、七月四日なんて！　僕たちやつぱり英本國の人間だつたらいいのになあ！（自分の慘めさにすつかり腹を立てながら、表の客間から大股に出てゆく。）

ミラー夫人　（心配さうにそのうしろ姿をぢつと見てゐたが――考へ深さうに溜息して）まあまあ、あれならそれほど惡くはなささうだ――あの樣子では。（頭をふつて）可笑しな子だ。時々わたしにはあの子のことがさつぱり分らなくなるよ。

ミラー　（奥の客間ごしに玄關から呼ぶ）おい、みんな、おいで。出かけるよ。

シッド　今行くよ、ナット。（彼と二人の婦人は表の客間をとほつて出てゆく。）

――幕――

第二幕

ミラー家の食堂――同じ日の夕方六時すこし過ぎた頃。

部室には、中どこの値段の、ひどく大きな食堂用の家具類がおいてあり、ことにいま、テーブルの折返しが全部開いてゐるので、そのために部室はあまりにも狹すぎる。左手、奥寄りに、引戸とカーテンの二重になつた戸口があつて、奥の客間へ通じてゐる。正面の壁、左手には、食料品室へ通ずる戸口。その戸口の右手には飾り戸棚があつて、家庭用のカットグラスや裝飾用の陶器類が陳列してある。右手の壁には窓が二つあつて、横手の芝生に面してゐる。窓の前には重々しく不體裁な戸棚があつて、その上には古い銀製品が三つのせられてある。左手の壁には、思ひきつて前寄りに、横手のヴェランダへ開いてゐる仕切戸がある。くすんだ色の絨氈が床の大部分を掩つてゐる。テーブルを取りまく椅子は、左右兩端に一個づつ、向う側にはこつち向きになつて三個、こつち側には背をみせて二個おいてあつて、利用しうる空間の大部分を占領してゐる。壁にはくすんだ褐

色と暗紅色の模様のある壁紙が貼つてある。

ミラー夫人は、女中のノーラが食事の支度をするのを監督し手傳つてゐる。ノーラは不器用で、手も足ものろく、顎の長い、始終にこにこしてゐる善良さうな若いアイルランド系の娘で――いはゆる「田舍者」である。

ミラー夫人　ほんとに電燈つけたらどうなのさ、ノーラ。外がだいぶ薄暗くなつてきたんで、この陰氣な部屋ったら、もう眞つ暗ぢやないの。

ノーラ　はい、奥さま。（不器用な好恰でテーブルの上にからだを伸して、天井の中央からさがつてゐるシャンデリアに手をやり、やつとのことでその一つを點もす――輕蔑するやうに）あらあ、變てこな仕掛けだねえ。

ミラー夫人　（氣をもんで）氣をおつけ！

ノーラ　はい、できるだけ氣をつけてをりますで、はい、奥さま。（しかし次の電燈をともさうとして動きまはつてゐるうちに、どしりとテーブルにぶつかる。）

ミラー夫人　それごらん！　だから言はないこつちやない！　氣をつけてくれな

いと困るぢやないの！

ノーラ　（その聲にまどついて訴へるやうな調子がまざる）あらあ、わたくし何、悪いことしましただか。

ミラー夫人　（深く息を吸つて――たよりなささうに溜息する）いや別に。あかりのことはもう構はないでよろしい。わたしが呼びりんを鳴らすまで、お前は臺所へ行つてた方がいいよ。

ノーラ　（ほつとして、再び快活になつて）はい、奥さま。（食料品室の方へゆく。）

ミラー夫人　ちよつとお待ち。言つとくことが一つあるから。（ノーラ、心配さうにふりむく）いや、二つだつたわ――何度となくお前に話すんだけど、お前はいつでも忘れてゐるんですよ。今夜、晩御飯のときにお皿を反對に廻すんぢやありませんよ。それから、あの臺所の戸をばしやんと締めないやうに注意なさい。さあ、今度こそ忘れないやうにするんだよ、いいかい。

ノーラ　はい、奥さま。（食料品室へはいつてゆき、ミラー夫人が心配顔で見守

つてゐるので、大袈裟にそつと戸をしめる。ミラー夫人は溜息をつき、それから、やつとのことでシャンデリアに手をふれ、四つの電球の一つをともす。彼女がさうしてゐる時、リリーが奥の客間からはいつてくる。）

リリー　あら、わたしにやらせて、エシー。わたしの方が背が高いんですもの。あなたぢや無理をなさるだけだわ。（素早く殘りの二つの電燈をともす。）

ミラー夫人　（感謝して）有難うよ、リリー。わたしにはやつとなのよ。すつかり肥つたもんだから。

リリー　だけど、ノーラはどこにゐるんですの、何だつてノーラが――

ミラー夫人　（激昂して）まあ、あの娘つたら！　あれのことは言はないで頂戴。あの女中にはほとほと困つてゐるんだから。頓馬も頓馬、大頓馬なんだもの。あなたにはとても信じられない位よ。

リリー　（微笑しながら）今、何かへまでもやつたんですか。

ミラー夫人　いいえ、別に。自分ぢやあれでちやんとやつてるつもりなんですか

らね。

リリー　ほかにお手傳ひすることなくて、エシー？

ミラー夫人　さうね、あれにやらしといたら食卓を目茶々々にしてしまつたんでね。やりなほさなくちやならないの。でも、あなたはいつでもお手傳ひして下さるでせう。ですから、お休みの日にまでお願ひするのはいけないことだわ。あなたつたら、年がら年中、インディアンの亂暴な子供を大勢教育していらつしやるんですもの。たまには休息の必要があつてよ。

リリー　（食卓を整へる手傳を始めながら）だつて、わたしお手傳ひするのが大好きなの。その方が、このお家に居候になつてゐるんでなくて、何かお役に立つてゐるんだといふ氣がするんですもの。

ミラー夫人　（憤慨して）居候？　だつて、あなたはそれだけのことはしていらしやるぢやないの。

リリー　ほんの申譯みたいにねえ。あなたにしろナットにしろ、わたしが一しよ

に暮すのに居辛くないやうにと、何にもおさせにならないんですもの。（無理に微笑して）どうしてわたしのやうなものを我慢しておいて下さるのか、わたしには分りませんわ――こんな偏屈なオールド・ミスを始終おそばにおいて下さるなんて――

ミラー夫人　そんな馬鹿なこと仰しやるもんぢやないわ。ナットやわたしが、あなたと一しよにゐるのを大變不滿に思つてでもゐるかのやうにさ。ねえ、リリー・ミラー、あなたがいつまでもそんな考を改めないんなら、わたし本當に我慢できませんよ。このことは、これまでに何十遍お話したかしれないのに、あなたつたらやつぱりかうなんだもの。本當に正氣の沙汰ぢやなくつてよ。（急に話題を變へる）何時になるかしら。

リリー　（腕時計を見て）六時十五分ですわ。

ミラー夫人　殿方たち、晩御飯におくれないようにお歸りだといいんだけどね え。（溜息して）でも、あのいまましいセイチャム・クラブの園遊會ですもの、

おそくなると見る方が間違ひないでせうよ。（リリーは心配さうな顔をして溜息をつく。ミラー夫人、ちらと横目でリリーを見る）新調のドレスお召しになつたのね。

リリー　（きまり悪さうに）ええ、わたし、あの――もしシッドが花火を見に連れてつてくれるやうなら――すこしおめかしした方がいいやうに思つたもんですから。

ミラー夫人　（目をそらして）さう。（間――それから、努めて何氣ない風を裝つて言ふ）もしシッドがいくらか上機嫌で歸つてきても、氣になすつちやいけないわよ。ナットだつてきつとさうよ――そして、わたしたち、あの人の子供の時分の、それこそ何度も聞きあきた例の話をきかなくちやならないのよ。あなただつて、あの園遊會がどういふものだか御存知でせう。それに、シッドは古いお友だちに大勢出會ふでせうしさ。

リリー　（躍起となつて）でも、今度にかぎつて――そんなことないと思ひます

わ――ああいふ約束をしたあとですもの。

ミラー夫人　（相手を見るのを避けて）そりやさうね。でも、男つて弱いものよ。（それから、素早く）シッドをウオターベリーの「スタンダード」社へ就職させたのは、ナットとしちや本當にいい思ひつきだつたわ。シッドにとつて一番必要だつたことは、ここで暮してゐたやうなやり方から一刻も早く逃げだすことだつたんですものね。あの人は悪い友だちの犠牲になつたやうなもんよ。友だち次第でどうにでもなるんですもの。――でも、心から悪い人ぢやなくてよ。それはあなたにだつて分つてるわね。（リリーは視線を下へ落したまま默つてゐる。ミラー夫人は下心あつて話し續ける）シッドはウオターベリーぢや收入だつて相當になるのよ――一週、三十五ドルですつて。結婚するには、以前よりかずつといい立場にゐるわけよ。

リリー　（硬くなつて）そりやね、萬事承知の上で結婚してもいいつて婦人があれば、ようございますがね。だつて、あの人、競馬にかけたり、博打をしたり、玉突を

やつたりするのを止めたとしても、奥さんの手にはいくらも渡せないでせう——よしんば、他になんにもお金を使はないにしてもですよ。

ミラー夫人　大丈夫、よしますわよ、お酒も女も——立派な婦人のためなら。

（突然、單刀直入に要點にふれる）ねえ、リリー、どうしてあなたは氣持を變へて、シッドと結婚して、あの人をため直してあげないのさ。あなたはあの人を愛してゐるんだし、今までだつてずつと——

リリー　（硬くなつて）わたし、お酒をのむ人を愛する氣になれませんわ。

ミラー夫人　だめよ、わたしをごまかさうつたつて。あなたがあの人を愛してゐるのは、わたしにはちやんと分つてるんですもの。それに、あの人だつてあなたを愛してゐるんだし、これまでだつてずつと愛しつづけてきたのよ。

リリー　でも、そのためにお酒をよすつてとこまで行かないんですもの。（ミラー夫人の返事を遮つて）いいえ、エシー。いくらお話しになつたつて無駄ですわ。この話はこれまでだつて何遍となく繰りかへしてゐるんですが、シッドが改

めないかぎり、わたしの氣持だつて變りませんわ。もしあの人が今までの生活をよすつて證據をみせてくれれば——いいえ、見せてくれたつて、そのとほりに實行するとは思へないんです。わたし、二人の間の婚約を破つてから、十六年になりますわ。でも、婚約を破つた理由は、今だつてその時と同じやうに、わたしにはつきりしてゐるんですの。だつて、あの人、誰と結婚したつて、やりかねませんわ——いかがはしい女と關係するなんて。

ミラー夫人　（半信半疑で抗議する）だけど、あの人、つい誘はれてさういふ遊びはしたことがあるが、淫賣をんなと關係をもつたことは一度だつてないつて、いつでも誓つてゐるぢやないの。

リリー　だつて、わたしには信じられないんです——あの時だつて信じられなかつたし、今だつて信じられませんわ。そりやその氣でやつたんぢやないつてことは信じますよ。だけど——まあまあ、こんなこと言つてたつて仕樣のないことですわ、エシー。過ぎたことは過ぎたことですもの。でも、わたしはシッドがとて

も好きなんですの――何だかだと言つても。結局、あの人はこんな風になるやうに生れついてきたんですわ――あの人に責任のないことです。人を傷つけるつもりは毛頭ないんだけど、心にもなく傷つけてゐるんです。だけど、あの人との結婚の話はもうなさらないで！　――わたしにはどうしても結婚できさうにもありませんから。

ミラー夫人　（怒つて）何て馬鹿なんだらう、あの人つたら！　――ぼんやりの、間抜けの、大馬鹿だわ！

リリー　（靜かに）いいえ、違ひます。あの人、やつぱりシッドですわ。

ミラー夫人　あなたにはお氣の毒ねえ――こんな詰らぬ恥つさらしなことつてないわ――あなたはどんな人と結婚しても立派な妻になつてゐられたのに――御自分の家庭と子供たちがあつていいはずなのに、そのあなたがさ！

リリー　（たじろいだが、しかし愛情をこめて片手を彼女にかけて――やさしく）もうわたしのことで悲しい思ひをなさらないで頂戴。わたしにはそれが辛いんで

すの。わたしはかうして、この世で一番いい家庭においていただいてゐるんですもの。あなたやナットの親切に本當に感謝しますわ。それに、子供たちのことといへば、まるで自分の子供ででもあるやうな愛情を感じるんです。生みの苦しみを味ひもしないで。その上、わたしには毎年教へる大勢の少年少女たちがゐます。わたしはその子たちの、言はば第二の母のやうなもので、子供たちが立派な人間に生長するやうに手助けしてゐるんだと、さう感じるのが好きなんですの、さう思ふと、わたしも結局それほど役に立たないオールド・ミスでもないやうな氣がするんですの。

ミラー夫人　（思はず彼女に接吻し――かすれ聲で）あなたつて本當にいい方ね、

リリー――わたしたちにとつてよすぎる位だわ。（顏をそむけて、こつそり涙をふき――それから急に話題を變へて）おやおや、大事なことをうつかり忘れるところだつたのに、まあよかつた！　トミーにお肴のことでナットに內通しないやうに注意しておかなくちやいけなかつたんだわ。今日はあの子を仕方なしに市場

へや　たもんだから、トミーつたらちやんと知つてるのよ。それに、あの子とき
たら、すぐ噴きたしてしまひさうだし――

リリー　噴きたすつて、何のことで？

ミラー夫人　（うしろめたい感じで）さうね、何か悪いことでも隠し立てしてゐる
やうな氣がして、あなたには一度もお話しなかつたのよ。だつて、ナットつた
ら、青い肴はたべられないつて、變にこだはるでせう。

リリー　さうね、自分は青い肴をたべると中毒するつて仰しやつてゐますわね。

ミラー夫人　（くつくつ笑ひながら）中毒だなんて、何でもないのよ。あの人つた
ら、何年となく青い肴をたべてゐるんですよ――ただね、わたしその度ごとに、
「弱魚」「いしもちの類」ですよと言つてるだけのことなの。今夜も青い肴なん
ですよ――だから、あの悪戯っ子に知らん顔をしてゐるやうに注意しとかなくち
やならないんですの。

リリー　（笑ひながら）恥しかないの、エシー？

ミラー夫人　どういたしまして。わたし、青い肴が大好きなの！（笑ふ）トミ
ーはどこかしら？　居間かしら？

リリー　いいえ、あすこにはリチァードだけですわ。トミーはミルドレッドと一
しよにヴェランダに出てゐるんぢやありません？（ミラー夫人はせかせかと奥
の客間から出てゆく。彼女が去るとリリーの唇のあたりから微笑が消えさる。そ
の顔はもの悲しさうになり、神經質に再び時計を見る。リチァードがこれといふ
目的もなく、ただ歩きまはりながら、奥の客間から出てくる。悲痛な憂鬱さで硬
ばつた表情をして、悲劇を放散してゐる。それといふのも、悲哀と屈辱の最初の
爆發がすぎさると、そのあとで深い悲しみの感情にしたり、とくに家庭内に引き
おこす心配を考へて、被虐待淫亂（ソヒスム）の満足を感ずるやうになつてゐるからである。
叔母の姿をみると、彼女に暗い一瞥を投げ、向きをかへて、居間の方へ傲然と歩
いて去らうとする。リリーはその時同情するやうに話しかける）いくらか氣分よ
くつて、リチァード？

リチァード　（陰氣に）大丈夫です、リリー叔母さん。僕のこと心配しないで下さい。

リリー　（近よつて）でも、心配になりますよ。あなたがそんなに惱んでゐるのを見るのが辛いのよ。

リチァード　何でもありません。何でも。

リリー　（同情するやうに彼に片手をかけて）本當にそんなに思ひ詰めちやいけませんよ。そりやね、何かがあると――ああいふことがおきると、希望もなにもなくなつたやうな氣がするものだけれど――

リチァード　ああいふことがおきるつて、どういふことがです？

リリー　あなたとミューリエルの間におこつたことですよ。

リチァード　（輕蔑して）ああ、あんな奴なんか！　あいつのことなんて考へたこともありません。僕は人生について考へてゐたんだ。

リリー　でもね、さういふ時でも――わたしたちが本當に、それこそ本當に愛してゐたら――すべてのことをまた變化させるやうな、何か他のことが、すぐ起つてくるにきまつてゐます。そして、誤解のおこらなかつた前とすつかり同じになつて、最後には萬事がうまく行くやうになるんです。それが人生といふものですよ。

リチァード　（悲劇的な嘲笑を浮べて）人生！　人生なんて戯れにすぎないよ！そして、最後には萬事がこぢれてしまふんだ！

リリー　（すこしどきつとして）そんな風に言ふもんぢやありません。でも、本氣ぢやありませんわねえ。

リチァード　本氣も本氣、大いに本氣です。リリー叔母さん、あなたにはそれがいいんなら、さういふ馬鹿げた樂天主義をおもちになるのもいいでせうさ。しかし、僕に向つてさういふ盲になれと言つたつて駄目です。僕は悲觀主義者ですからね！　（それから冷酷な皮肉主義らしい態度で）ミューリエルのことなんて、もうすつかり死んでしまつて、過ぎさつたことです。とにかく、僕はちよつと

からかつてみただけなんです――冗談半分にね――ところが、向うぢやそれを眞劍にとつたんです。馬鹿のやうにさ。（强ひて唇のあたりに皮肉な微笑を浮べて）世間で女と電車について言つてる文句を御存知でせう――間もなくお次が參りまずつてね。

リリー　（今度は本當にどきりとして）そんな怖ろしい皮肉なことを言ふときのあなたは、わたし嫌ひですわ。それは立派なことぢやなくつてよ。

リチァード　立派！　女の考へることつたら、きまつてそれだ！　僕は皮肉屋であるのが得意なんだ。人生に本當に直面すれば、さうならざるをえませんよ。あなたはきつと僕がミューリエルのことで失戀するのが當然だとお考へなんでせう。何さ、あんな卑怯者――自分の魂が自分自身のものだといふのを恐れ、ひたすら親爺の意のままになつてゐるなんて！　さうさ、僕のこと思つたら、あんなことできるもんか！　ふん、海にはほかに魚がどつさりゐますよ。（これを言ひ終つたとき、母親が奥の客間をとほつて戻つてくる。）

ミラー夫人　おやおや。お前、ここにゐたのかい、リチァード。おなかがすいたでせう。

リチァード　（ぷんぷんして）すいてませんよ、ちつとも。お母さんの考へることといつたら、きまつてそれだ――すぐ食ひもんのこつたからな。

ミラー夫人　おやおや。だけど、食事どきにお前が二の足をふむのを、お母さんはただの一度だつて見たことがありませんよ。本當にさ。（リリーに）海の魚のことで何だと言つてたんです？

リリー　（微笑しながら）ミューリエルのことはもう思ひ切つたと言つてらしたんですよ。

ミラー夫人　（鋭く――咎めるやうな目つきで息子を見て）思ひ切つたのは向う樣のほうでせうよ。この子の言つたのはさういふ意味なんでせう。あんな立派な娘さんに、ああいふいかがはしい本から書きぬいたものを送るなんて、よくもまあそんな！　（リチァードはすつかり腹を立て、返事をするのをいさぎよしとせ

す、左手前寄りの仕切戸の方へ心傷ついた様子で傲然と歩いてゆき、戸のハンドルに手をかける）どこへ行くんです。

リチァード　（うつろな聲で「キャンデイダ」から引用する）「では、僕と一しよに夜の闇のなかへ出てゆきませう！」（彼は戸をぴしやりと締めて、傲然として出てゆく。）

ミラー夫人　（呼ぶ）もし、遠くへ行くんぢやありませんよ。すぐ晩御飯になりますからね。呼びに行きませんよ。（くすくす笑つて、リリーの方へ向いて）まあまあ、何て子でせう！　まるで舞臺にでも出たみたい！　（眞似をして）「夜の闇のなかへ出てゆきませう」――ふん、まだそんなに暗くなつてゐないのに！　これもきつとあの本のどれかにあつたんですよ。わたしはね、あの子がミューリエルのことでいい氣になつてゐるのを、デーヴ・マッコーマーがきつぱりけりをつけてくれたんで、本當に有難いと思つてゐるのよ。だつて、リチァードが女の子にあんなに興味をもつのを、わたしいいことだと思ひませんもの。そんな馬鹿げ

たことをするほど大人になつてゐないんですから。だつてね、あの子がまだ赤ん坊だつたのが、わたしにはまるで昨日のやうな氣がするんですよ。（溜息し――それから實際的な態度で）さてと、お二方のお歸りまで、もう何にもすることはなしと。間抜けみたいにここに突っ立つてても仕樣がないわ。居間へ行つて、らくにしてゐませうよ。

リリー　（その聲にまた神經質で心配さうな調子があらはれる）さうね、その方がようございますわ。（二人は奥の客間をとほつて出てゆく。その姿が見えなくなるかならぬうちに、仕切戸が注意ぶかく開いて、リチァードが部屋へ戻つてくる。）

リチァード　（戸の内側に立つて、二人のあとを見送り――苦々しい調子で引用する）「二人とも詩人の心のなかの秘密を知らないのだ。」（彼は食卓へ近よつて、食卓を、とくにオリーヴズ〔肉片を野菜で卷いて蒸煮した料理〕を盛つたカット・グラスの皿を、輕蔑したやうに眺めて呟く）食ひものか！　（しか

し、オリーヴズの皿が彼を誘惑したとみえて、つかつかと食卓に近よつたが、こつそり二きればかりつまみあげて、口へ押しこむ。さらに手を伸してつままうとした時、食料品室の戸がそつと開いて、ノーラが覗く。)

ノーラ　ディックさんの泥棒、そのお料理に手をふれちやいけねえだよ。さもないと奥様がわたしがつまんだと仰しやるにきまつてゐるだ。

リチァード　(刺されでもしたかのやうに、ひよいと手を引つこめる——すつかり狼狽してしまつて、しばらくは悪いことをした少年そのものである)僕——僕たべやしないよ。

ノーラ　さうでせうよ、そりやさうでせうよ。ただほんのちよつぴり氣を引いてみただけづらあ。(それから警告するやうに)二度ととんなことなさらねえで下さいましよ。さもねえと、わたしが汚名をきないやうに、あんたのこと言ひつけなくちやなんねえでがすから。(彼女は戸をしめて食料品室へ引つこむ。リチァードは悲痛きはまりなき屈辱の思ひと、あらゆる人間、あらゆる物にたいする煮え

立つばかりの反逆との餌食になつて、突つ立つてゐる。ヴェランダの戸のすぐ外で、低い口笛の音がする。彼ははつとする。それから、男の聲が「おい、ディック」と呼ぶ。彼は不機嫌な様子で仕切戸へゆく——それから、聲の主が誰だか分ると、彼の返事をする聲が丁寧で敬服するやうな調子になる。)

リチァード　やあ、今晩は、ウィント。どうぞ、はいつて下さい。(彼が戸を開けると、ウィント・シルビーがはいつてきて、戸のすぐ内側のところに立つ。シルビーは十九歳で、エール大學におけるアーサーの級友である。彼は當時の典型的な美男の大學生で、競技の方ではないが騒ぎ廻ることの好きなスポーツ型である。背が高く、極端にカレッヂ風な仕立ての服裝をしてゐる。)

ウィント　(はいつてきて——警戒するやうに低い調子で)おい、靜かにしな。僕がここへ來たの、誰にも知られたくないんだよ。アートにね、僕がちよつと會ひたいつて、さう言つてくれよ——内緒にだぜ。

リチァード　駄目ですよ。兄さん、ランドの家へ行つてるんです——どのみち十

時前には歸らないでせう。

ウィント　（いらいらしながら）ちえッ、晩飯にはうちにゐるだらうと思つたんだ。（一層いらだつて）畜生、これぢや折角の計畫も臺なしだ、全くだよ！

リチァード　（取りいるやうに）どうしたんですか、ウィント。僕ぢやお役に立ちませんか。

ウィント　（相手を鑑定するやうにぢろりと見て）君が默つてゐることができれば、話してもいいんだがね。

リチァード　僕、默つてゐます。

ウィント　實はな、今日の午後、ぴちぴちした女の子に二人出會つたんだ。二人ともニュー・ヘヴンから來たんだがね。僕、そいつらと今夜會ふ約束をしたんだよ。アートがつかまるだらうと思つたもんだから。だけど、これから他の相棒をさがすにや、もう時刻がおそすぎるし、まあ仕方がない、お流れにしてしまふ外あるまい。僕は懷具合が寂しいんで、奴ら二人に派手に飲ませるだけの

餘裕がないんだよ。

リチァード　（はにかみながら熱心に）僕、十一ドル貯金があるんです。よかつたら、いくらか御用立てしませうか。

ウィント　（感心したやうに彼を眺めて）ほう、君、なかなか話せるな。（それから、頭をふつて）いいよ。君から金を借りる氣はないんだから。（それから、或る考が浮んで）おい、君、今夜何か用があるかい。

リチァード　いいえ。

ウィント　どうだい、一しよに來る氣ないかい。（それから素早く）僕は何も君を誘惑しようつてんぢやないんだぜ、いいかい。ただね、君が來てくれると大助りなんだ。なに、君はベルのそばにゐて、ちよつと酒のお相手でもしてゐてくれりやいいんだよ。その間に、僕はイディスとほかの部屋へ行つてるから。（目で合圖して）僕の言ふこと分るかい。君は何にもしなくていいんだぜ。いやだつたら、ビールだつて飲まなくていいんだぜ。

リチァード　（誇り顔に）僕をどういふ人間だと思ふんです――野暮天だとでも思ふんですか。

ウィント　ぢや、さういふこと何でもやる勇氣があるつていふのかい。

リチァード　ありますとも。

ウィント　これまでに女の子と一しよに外へ出たことあるかい――僕のいふなあ、相手にして不足のないぴちぴち意勢のいい奴で、ここいらにゐる死んだやうな娘っ子のことぢやないんだぜ。

リチァード　（大膽に嘘をつく）あなたはどう思ふんです？　僕、ありますよ。

ウィント　ソーダ水でない奴、飲んだことあるかい？

リチァード　ええ。度々。ビールだつて、スロー・ジン・フィズ〔黑茨の實を漬けたジン酒を炭酸水に割つたもの〕だつて――マンハッタン〔カクテール〕だつて。

ウィント　（感心して）へえ、君は僕が思つたよりもよく知つてるね。（それから考へながら）うちの者に感づかれないやうに、巧くやれるかい。君の親爺にあとをつけられちゃ、やりきれんからな。だけど、十時半か十一時までには大丈夫歸れるよ。何とか嘘をでつちあげて、巧くごまかせるかい。（リチァードが躊躇するので――彼をけしかける）お茶の子さいさいぢやないか――四日の獨立祭だもの。

リチァード　大丈夫です。御心配いりません。

ウィント　だけど、君はこのことについちゃ知らん顏してゐなくちゃいけないぜ。いいかい。――アートにも、誰にも。僕ははつきり言ふが、進退谷まりさへしなけりゃ、君に來るやうに頼みやしなかつたんだぜ。――それにさ、君は來年エールへ來るつてことだし、以前にもかういふ經驗があるつて打ちあけてくれたんで、それで頼む氣になつたんだよ、僕はね、決して君を誘惑するつもりはないんだよ。

リチァード　（輕蔑するやうに）そんな馬鹿なこと、言はなくても分つてます。

ウィント　ちや、九時半に「樂しき海濱ホテル」へ來てくれ。奥の部屋へはいるんだ。それから、息が酒臭くちや一遍だから、丁香をもつてくれるのを忘れるなよ。

リチァード　どうしていいか心得てゐますよ。

ウィンド　ちや、あとで。（彼は去りかけて、まさに戸をしめようとして、何か思ひつく）それからな、君のことをハーヴァード大學の一年生だといふから、口裏を合せろよ。奴ら、ハーヴァードのことなんか何にも知りやしないから。なにせ中學生と一しよにうろうろしてゐると思はれちや面目ねえからな。

リチァード　分りました。お安い御用です。

ウィンド　ちや、あばよ。晩飯がすんだらすぐ脱けだした方がいいぜ。チャンスのあるうちにな。そして、時間がくるまで、どつかうろついてゐるんだ。抜かりなくやれよ。

リチァード　さようなら。（ウィントのうしろの戸がしまる。リチァードはしば

らく突つ立つてゐる。悲痛で傍若無人な反抗の表情があらはれ、ひとり呟く）その女に他の奴を扱ふやうに僕を扱ふわけにゆかないつてことを見せてやらう。よし、奴らみんなに思ひ知らしてやるぞ！　（その時、玄關の戸のしまる音がして、間もなくトミーが奥の客間から驅けこんでくる。）

トミー　ママどこ？

リチァード　（つつけんどんに）居間だよ。馬鹿だな、どこだと思つたんだい。

トミー　パパとシッド叔父さんが歸つてくるよ。ミッドと僕で表のヴェランダから見つけたんだ。うれしいなあ。僕、おなかがぺこぺこなんだ。兄さんはへつてゐないの？　（奥の客間から、呼びながら驅けだす）ママ！　お父さんたち歸つてきたよ。早く御飯にしてよ！　（間もなくミラー夫人が奥の客間から出てくる。トミーはそのあとについて、相變らずせがんでゐる）だつてさ、僕、お腹とつてもぺこぺこなんだよ！

ミラー夫人　分つてゐます。あなたつたらいつでもさうぢやないの。絲虫でもゐ

るんでせう、きつと。

トミー　海老があるの、ママ？　うれしいなあ。僕、海老とつても好きなんだ。

ミラー夫人　ええ、海老の御馳走ですよ。それからお肴。お肴のことでお前に言つたこと覺えてゐますね。（トミー、くすくす笑ふ）これ、トミー、笑ふんぢやありません。（それから、リチァードに向つてからかふやうに微笑して）おやまあ、リチァード、夜の闇からお歸りになつてゐたんですか。（彼はいやな顏をして母に背を向ける。リリーが神經質な心配さうな様子で奥の客間から出てくる。その時、前庭からシッドが「可哀さうなジョン！」を歌ふ聲がきこえる。ミラー夫人は何かを豫知するやうに頭をふる——しかし、自分の弟の聲ではあるが、彼女にとつてさへその滑稽な魔力が強く働いたので、つい可笑しくて微笑が唇のほとりに漂ふ）ふん！　ふん！　リリー、これはきつと——

リリー　（苦々しく）ええ、こんなことぢやないかと思つてたんです。（ミルドレッドが奥の客間から走つてくる。彼女はきまり悪がつてひとりで笑つてゐる。

母のそばに驅けよる。）

ミルドレッド　ママ、シッド叔父さんから——（母の耳元へささやく。）

ミラー夫人　いいんだよ。そんなこと氣にしなくともいいんだよ——お前の年その で。それに、シッド叔父さんの馬鹿げた様子を笑つたら、なほのこと叔父さんを増長させるやうなもんだからね。

トミー　こつそり言はなくてもいいよ、ミッド。僕に分らないと思ふの。シッド叔父さんまた醉つぱらつてるんだよ。

ミラー夫人　（怒つてトミーの腕をゆすつて）お默り。御行儀のわるい！　すこしおしやますぎますよ、あんたは！　（トミーを押しやつて）自分の席へ行つて、ちやんとお坐りして、もう一言も口をきくんぢやありません。

トミー　（不平滿々たる様子で——腕をこすりながら自分の席へゆく）はい、ママ。

ミラー夫人　リチァードもミルドレッドもお坐り。あなたもどうぞ、リリー。叔

父さんにすぐここへ來ていただいて、何か召しあがつて頂きませうよ。さうすりやすぐによくなるでせうから。（リチァードは悲痛にして幻滅にとらはれた悲觀主義者のポーズをつづけながら、背中をこつちへ向けてゐる二つの椅子の、右の方に席をとる。ミルドレッドは、その左手にかける。トミーはテーブルの向う側にあつてこつちを向いてゐる椅子の一番右の席に、すでに坐りこんでゐる。リリーは同じ側の左、上座にちかく坐つて、中の椅子をシッドのために空けておく。一同がかうして席についてゐる間に、玄關の仕切戸のしまる音がして、ナットとシッドの笑ひ聲が、はいつて來てしばらく高くなるが、それから急に用心ぶかさうに低くなる。ミラー夫人は奥の客間の戸口のところへ行つて、命令するやうに言ふ。すぐこつちへいらして下さい。手を洗つたり何かすることがあつたら、さつさとして頂戴。食事はすぐ運ぶばかりになつてるんですから。

ミラーの聲　（陽氣に）分つたよ、エシー。御歸宅だよ。御歸宅だよ。

ミラー夫人　（食料品室の戸口へゆき、戸をあけて、呼ぶ）いいよ、ノーラ。ス

ープを運んでよろしい。（奥の客間の入口まで戻つてきた時、丁度ミラーがはいつてくる。彼は必しも醉つてゐない。まさに陶然として程よきほろ醉ひ加減である。彼の顏は人生を十分に樂しんでゐる大きな、にこにこした、幸福さうな輝きにあふれてゐる。この世のことは萬事好都合に運んでゐて、それを考へただけでセンチメンタルに感動するほど全く滿足すべき狀態である。）

ミラー　御歸宅だよ、エシー。時間はまさに申分なし。御歸宅だよ。（彼女を引きよせ、耳のところへ音を立てて接吻するので、彼女は頭をひよいとそらす。ミルドレッドとトミーはくつくつ笑ふ。リチァードは超然として輕蔑するやうな態度を持し、物思ひに沈むやうにぢつと皿に目を落してゐる。リリーは無理に微笑する。）

ミラー夫人　（身を引いて——きまり悪さうに、殆んど赤くならんばかりになつて）およしなさい！　氣でもちがつたの、あなたつたら！　（それから平靜を取りもどして——嚴格に）はい、お歸りなさい。わたしがお歸りなさいと言は

ないからつて、御歸宅だ御歸宅だともう四遍も仰しやるなんて！

ミラー　（晴れやかに）おい、エシー、うるさく言ふな！　さう小言でもいふやうにうるさく言つちやいかん！　いいニュースはいくら繰りかへしたつていいんだ。さうぢやないか、ええ。まさにそうだろうが。（彼女の肥つたお尻をはしやいでたたく。トミーとミルドレッドは大悦びで笑ひとける。丁度その時、スープのはいつた蓋つきの大鉢を兩手にささげて食料品室からはいつてきたノーラもうれしさうに大笑ひに笑ひだしたので、あやふく大鉢を取り落さんばかりになる。）

ミラー夫人　（感情を害して）ナット！　恥しくないの！

ミラー　さうせずにはゐられなかつたんだよ。ついその、何だ、さうせずにはゐられなかつたんだよ。（ノーラはスープの大鉢を堅くなつて相變らず前へさしだしてゐたが、また大笑ひに笑ひだす。）

ミラー夫人　（かんかんになつて怒つてノーラの方を向いて）ノーラ！　そのス

ープをすぐここへ持つておいで！　（彼女はしかつめらしく勿體ぶつて、食卓の右手、下座の自分の席へ歩いてゆく。）

ノーラ　（やましさうに）はい、奥様。（食卓の上座を廻つて、ミラーのそばを通りながら、スープをはこぶ。）

ミラー　（はしやいで）よう、どうだい、ノーラ！

ミラー夫人　あなたつたら！　（食卓の下座へしかつめらしく坐る。）

ノーラ　（馴々しくミラーを咎め立てして）あらあ、旦那様、笑はしちや困りますだよ。

ミラー夫人　これ、ノーラ！

ノーラ　（すこし無念さうに）はい、奥様。只今。（スープの大鉢をミラー夫人の前にどしりとおいて、反對の側を廻つて、飾り戸棚と食卓の向うの椅子の背の間を窮屈さうにとほる。）

ミラー夫人　トミー！　ナプキンをぐるぐる廻すのはおよし！　何遍言つたらい

いの、お前には。ミルドレッド！　姿勢をよくして坐つてゐなさい！　せむしになりたいんですか。リチァード、テーブルに肘をつくんぢやありません！

ミラー　（上機嫌に兩手をこすり合せながら、食卓の上座へきて）善きかな、善きかな。全く善きかな、善きかな。家庭へ歸るのは全く善きかなだ。（ノーラ、食料品室へはいり、どしんとうしろで戸をしめる。）

ミラー夫人　（飛びあがつて）まあ！（それから、かんかんになつて）ナット、あんな馬鹿な娘に話しかけて、增長させないで頂戴。わたしが一所懸命躾けをしてゐるのに——

ミラー　（晴々した調子で）分つたよ、分つたよ、エシー。お前の言葉は法律だからな。（それからにこにこしながら）いやどうも、今日は全く面白かつたよ。それに、シッドときたら、園遊會の花形なんだ。お前にきかせたかつたねえ。かけひきなしの話が、シッドの言ふことで、みんなが腹をかかえて轉げ廻り、まさに抱腹絶倒つてところだつたんだよ。あいつ舞臺に立つて然るべしだな。

ミラー夫人　（ノーラが鹽氣のものを入れた皿をもつて戻つてきたので——夫人は自分の前につみ重ねてある皿に大匙でスープをすくひ始める）あの人もこのテーブルへきて、醉をさますために何かたべるべきですわ。本當にさうすべきですわ。（呼ぶ）シッド！　すぐこつちへいらつしやいな！　（それからノーラにスープの皿をわたしながら）はい、ノーラ！（ノーラはスープの皿を廻しはじめる）ナット、坐つて頂戴、後生ですから。さあ、皆さん、いただきませう。わたしには構はないでいいの。わたしはスープはいただかないことにしてゐるんですから。

ミラー　（坐つたが、いかにも内緒話をするやうに妻の方へ乘りだして）エシー——シッドはね、ここへ來るのを、ちよつときまり惡がつてゐるんだよ——その、何だよ、すこしばかり、その——なに大したことはないんだがね——ついその、大勢の友だちに會つたもんだから——いいかい、あんまり辛く當るなよ。七月四日はクリスマスみたいなもんだよ——年にたつた一度しか來ないんだから。

氣がつかないやうなふりをしてくれよ。いいかい。それから、お前たち、子供たちもだよ。リリー、あなたもね。あれはあなたを怖がつてゐるからね。

リリー　（ぎごちない柔順さで）はい、分つてゐますわ、ナット。

ミラー　（再び晴々して――呼ぶ）おうい、シッド！　敵兵見えずだ！　（スープを貪るやうに飲みはじめる）こりや、うまい、　エシー。うまいスープだぞ。（すぐと、シッドが奥の客間から姿をあらはす。彼の狀態たるや、曖昧模糊としてゐると言つた方が一番適切である。その動作は朦朧とした不確かさをもつてゐる。彼のテカテカ光る肥つた顏は、にたにたし、模糊として笑ひ、悪戯好きの妖精パックのやうに、腕白小僧のやうに笑つてゐる。その目も模糊とし、不思議さうにきよときよとしてゐる。彼ははいつてくると、何氣ない、少しも酔つてゐないといふ涼しい顏をしようとして、しかつめらしく一所懸命に努力する。彼は片手を當てもなく振り動かし、ひどくぐそ眞面目に話す。）

シッド　やあ、今晩は。（一同、目を皿の上へ落したまま「今晩は」と返事をする。彼は話をするのに懸命な努力をつづけながら、自分の席の方へ不確かな足取りで歩いて行く）實に美しい夕方だ。こんな美しい入り日を今までに見たことがありませんよ。（リリーのうしろを通らうとして、ふらふらとリリーの椅子にぶつかる――忽ち、非常に眞面目くさつた丁重さになつて）これはとんだ失禮を――どうもとんだ失禮をいたしました、リリー。どうかお許し下さい。

リリー　（皿に目を落したまま――ぎごちなく）どう致しまして。

シッド　（やつとのことで、自分の椅子に坐つて――ひとりで呟く）はて、おれは何を言つたのかな。ああ、入り日のことか。だが、何だつておせつかいな！太陽の沒するは、これ理の當然ぢやないか。己のことをかへりみよだ、己のことを。（このことを考へながら、思案顏にちよつと言葉をきる――それから、ひとりひとりの顏を眺めながら、何か深い謎にでも直面したかのやうに、ぼんやりした、模糊たる、いぶかるやうな目つきで見る。それから突然、にたりと笑つて、滿足さうにうなづく）みなさん、さうでせうか。僕の言ふこと間違つてゐます

か。

ミラー　（機嫌をとつて）さうだとも。

シッド　さうだとも！　（スープの皿を何か不思議な謎ででもあるかのやうに見つめて、しばらく默る。それから、終に顏をあげて、姉の顏を眺め、いぶかるやうな驚きをもつてたづねる）スープ？

ミラー夫人　むろん、スープですよ。何だと思つたのさ。さあ、いそいで召しあがれよ。

シッド　（再びスープを驚いたやうに眺めて）なるほど。（それから突然）なるほど、さうだ。たしかにスープだ。（スプーンを取りあげて、たべはじめるが、二度ばかりやつてみてどうも巧く口のところへ持つてゆくことができないので、スプーンに向つて悲しさうに言ふ）おい、スプーンよ、これが親友にたいする仕打ちかよ。（それから突然、滑稽に怒つて、スプーンをばしやんと下へおく）やい、くたばつちまへ、スプーンめ！　（スープの皿を持ちあげて、演說する）「われ

われは既に死したるもののために乾盃し、次いで死せんとするもののために萬歲を叫ぶものである。」（眞面目くさつて左右へお辭儀をする）淑女竝びに紳士諸君、御健康を祝つて乾盃します。（スープを飲みはじめる。ミラーははつはつ笑ひ、ミルドレッドとトミーはくすくす笑ふ。リチァードさへも憂鬱を忘れて、くすりと笑ふ。ミラー夫人は微笑をかくす。ただリリーだけが硬くなつて默つてゐる。）

ミラー夫人　（無理にきびしく）シッド、何です！

シッド　（スープの皿をちよつと唇から離して、彼女の顏を覗いて）ええ？

ミラー夫人　何でもありません。お構ひなく。

シッド　（しかつめらしく怒つて）あなたは公衆の面前において――わたくしを公然と批難なさるのですか。スープは液體ではないですか。液體は飲むものではないですか。（このことをひとりで考へながら）液體を飲んだからつて、それがどうだといふんだ。立派な人間の、單なる失策にすぎんぢやないか。（再び一同を

朦朧と眺める）僕の言ふことは、正しいか、それとも間違つてゐますか。

ミラー夫人　いそいでスープをあがつておしまひなさいよ。馬鹿なこと言はないでさ。

シッド　（彼女の方へ向いて――再び怒つて）そりやね、エシー、僕がさ、小羊の肢でも飲むほど己を忘れたことでもしたといふんなら、そりやあなたから何と言はれても仕方がないが――おつと、言ひすぎたかな――つまり、その、スプーンでスープをたべる無駄な努力のことを考へてごらんよ――一皿啜るのに五十遍もスプーンを持ちあげるなんて――地球上には何億といふスープをたべる者がゐるんだ――考へただけでもふらふらするよ。（それからひとりで陰氣に）僕にはスプーンなんてもうお拂ひさげだ。筋肉を發達させる氣なら、サンドウ發明の體力增進器でも買つて振りまはした方がましだ。（スープの殘りを一のみに飲んで、急にすつかりうれしくなつて、みんなをにこにこと見渡して）みなさん、わたしの言ふことは間違つてゐますか。

ミラー　（可笑しさで息が詰まりさうになつてゐるが）はつはつ！　君の言ふとほりだよ、シッド。

シッド　（ぼんやり彼を見て、悲しさうに頭をふる）ナット老人つたら、可哀さうに！　いつもへまばかりやつてゐる――心は黄金なんだが――いとも純粹な黄金なんだが。殘念ながら御注意申しますが――またしても酔つぱらつてゐるんです。姉さん、あなたやあなたの父無し子のことを考へると、僕の胸は悲しみで痛みますよ。

ミラー夫人　（くつくつ笑ひのこみあげてくるのを抑へながら――きびしく）シッド！　すこしぐらゐ默つてゐられないんですか。みなさん、スープのお皿まはして頂戴。ノーラが取つてくれるのを待つてたら、夜つぴてここにゐなくちやなりますまいよ。（一同、銘々の皿をまはす。ミラー夫人はそれをつみかさねて、戸棚の上におく。彼女がさうしてゐる時、ノーラは燒き肴の大皿をもつて食料品室から出てくる。彼女がそれをミラーの前におかうとした時、シッドはぼんやり彼

女の視線をとらへ、立ちあがつて、たよりないが丁寧なお辭儀をする。）

シッド　（恍惚として）おお、見るも嬉しき出現！　わが美はしの佳人、星のごとき目をもてる麗人よ——

ミラー夫人　シッドつたら！

ノーラ　（ひどく悅んで——シッドに向つてふざけるやうな、媚びるやうな流し目をして）まあ、シッドの旦那様、一杯召しあがつてゐると、とても御世辭がお上手ですだよ。

ミラー夫人　（怒つて）ノーラ！　そのお肴を下へおおき！

ノーラ　はい、奥様。（彼女は急いで肴をミラーの前におかうとするが、ミラー夫人の方へおどおどした視線を向けてゐたので、皿の縁でミラーの頭の横をごつんと打つ。）

ミラー　あッ、痛ッ！　（子供たちは、リチァードさへ、思はずどつと笑ふ。）

ノーラ　（皿を落さんばかりになつて）あらまあ！　御怪我はございましねえだか。

ミラー　（頭をこすりながら——人が好ささうに）いや、大丈夫、怪我はないよ。だか、注意しなくちやいかんよ、注意しなくちや。いいか、ノーラ。

ノーラ　（感謝するやうに）はい、旦那様。（ほつと安心した溜息とともに、皿を彼の前にどしんとおく。）

シッド　（まだ突っ立つてゐたが——醉っぱらひらしい重々しさで）佳人よ、注意するがよろしい。悪くすると、頭以外のところを打つてゐたかもしれないのだぞ。いつでも頭を狙ふんだぞ。いいか——それなら心配はないからなあ。（子供たち、またどつと笑ふ。ノーラも笑ふ。リリーさへ突然ヒステリカルな笑ひをもらし、笑ひのために苦しさうな様子である。）

リリー　御免なさい、ナット。わたし笑ふつもりぢやなかつたんですけど。（シッドの方へ向いて荒々しく）お坐りになつて、御自分を馬鹿になさるのをお止しになつたら如何ですの。（シッドは傷つけられた悲しさうな表情で彼女を見て、

それから柔順に自分の椅子に坐る。）

ノーラ　（愉快さうに、にこにこしながら、リリーの背中を安心させるやうにたたく）リリーさん、あの方のこと御心配なさることねえでがすよ。お酒が廻つてるだけのことつたから。なにね、あれで氣はいたつていい方なんだもの。

ミラー夫人　ノーラ！　（ノーラはぴしやりと戸口をしめながら、急いで食料品室へ去る。ミラーが肴を分配し、それがくばられてゐる間、しばらく沈默。ノーラが野菜をもつてはいつて來て、また出てゆく。それも皿に取りわけられる。）

ミラー　（最初の一口をたべようとして――突然やめて、妻にたづねる）こいつまさか青い肴ぢやあるまいね、ええ？

ミラー夫人　（トミーを警告するやうに見て）むろん、さうぢやありませんわ。だつて、うちぢや青い肴をいただいたことないぢやありませんか。あなたのために。

ミラー　（自分の奇妙な癖を告白する人の、あの生眞面目さをもつて一同に話しかける）どうも困つたことだがね、青い肴には一種特別の油があつて、わたしは

必ずそれに中毒するんだよ。（この言葉でトミーはもう我慢できなくなつて、噴き出してしまふ。ミラー夫人は困つたといつた風にトミーを見たが、これも笑ひ出す。リリーも抑へることができなくてヒステリカルに笑ふ。リチァードとミルドレッドもそれに引つこまれて笑ふ。ミラーは今やその威嚴をいくらか失つて、弱々しい微笑を浮べてみんなを見まはす）僕の中毒するのが、どうしてそんなに可笑しいのか、どうも分らんよ。

シッド　（じろじろ左右を見て――醉つぱらひの勘のよさで）ははん！　ナット、こいつあ陰謀があるぞ――陰謀が。この肴は僕の目には青く見えるぜ――たしかに青く見えるぞ――その證據には、悄然としどぎまぎして――（フォークで芝居もどきにミラー夫人をさして）見るがいい、あの罪に惱む樣子を――まさにあれこそ――まぎれもないルクレチァ・ジョージァだ！（正しくはルクレチァ・ボージァなのだが、それを間違へて耳馴れた州名ジョージァにおきかへてしまつたのである。尙、ルクレチァ・ボージァは十五世イダリーの美貌の公爵夫人で、夫を

三たび變へ、夫を毒殺の噂を立てられたが、證據のあがらなかつた謎の女。」この女がこの長い年月、君を徐々に毒殺しようとしてゐたなどとは、そんなことがありうることだらうか。だが、何たる好運ぞ——君はそれに耐へてきたのだ。まさしく鐵のごとき體質だ。今でさへ、君は相變らず死の門口に立つてゐるのに、ああ、それだのに——（一同、笑ひを抑へることができないで、笑ひこける。）

ミラー　（不機嫌に）馬鹿々々しい。すこし靜かにしてくれ。冗談は冗談としてだ——（氣持をそこねた調子で妻に向つて言ふ）これは本當なのかい、エシー。

ミラー夫人　（涙をふきながら——ひるまずに）ええ、本當ですわ——知りたいと仰しやるなら申しますけどね。トミーがゐなかつたら、またシッドがいらないお節介をしなかつたら、あなたはいつまでもお分りにならなかつたでせうにねえ。あなたつたら何年となく青い肴をたべて、それで榮養をとつていらしたんですよ。一種特別の油があるなんて、本當に馬鹿々々しいお話ですわ。

ミラー　（すつかり機嫌をそこねて）僕の體のことは僕にまかせてくれ。なるほ

ど、そのせいだつたんだな——肴をたべたあとは、きまつて體の調子が悪かつたのは。（こんなものには目もくれぬと言はんばかりに皿を押しやつて）こんなものの食へるもんか。

ミラー夫人　（取り合はないで、素つ氣なく）ちや、およしなさい。海老がたくさん出ますから、それをどつさり召しあがつたらいいでせう。（リチァードが突然また笑ひだす。）

ミラー　（彼の方へ向いて辛辣に）お前、だいぶ御機嫌のやうだな、リチァード。お前は今日は意氣銷沈の本家本元かと思つてゐたのに。

シッド　（ひやかし半分に同情して）氣にするこたあないよ、ディック。笑ふ奴は勝手に笑へだ。その髪は熱して音を立て、その唇は花火にも似て赤く、その瞳は灼熱せる火花のごとく輝く——かかる乙女を、彼らなどか知らんや。

ミルドレッド　（笑ひ出して）それ、ディックがミューリエルに書いてやつた文句なの？　（兄の方へ向いて）兄さんの色魔！

リチャード　（つつけんどんに）默れ、ミッド。ミューリエルなんて何だい。僕はこれつぱちも思つてゐないつてことを、みんなに見せてやるぞ。

ミラー夫人　みなさん、おすみになつたらお皿をすぐ廻して下さい。もう呼びりんをならして海老をもつてくるやうに言ひつけましたから。それで最後ですの。ようこざんすか、海老のあとは、果物もお茶も出ませんよ。（ノーラは冷やしたボイルド・ラブスターの大皿をもつて出てきて、それをミラーの前において、去る。）

トミー　いいなあ。僕、海老大好きなんだ。（ミラーは一匹づつ皿にとり、皿は廻はされ、一同、割れ目のついた殼を剝しはじめる。）

ミラー　（二口ばかり喰べると、すつかり機嫌がなほつて——會話の調子を變へようと思ひたつて、娘に話しかける）ミルドレッド、海岸は面白かつたかね？

ミルドレッド　ええ、すてきだつたわ、パパ。水がとてもすばらしくて、暖かくて。

ミラー　遠くまで泳いだのかい。

ミルドレッド　ええ、あたしとしちや。でも、そんなに遠くないのよ。

ミラー　もしお父さんに似たら、お前もいい泳ぎ手のはずだよ。何しろお父さんときたら、子供の時分は、本物の河鼠そつくりだつたんだからな。近いうち、お前をつれて海へ行かなくちやなるまい——もう何十年と泳がないんで、體がきかなくなつてるかもしれんがね。（度々言ひ古した少年時代の冒險談にまたも乘り出さうとする人の、追想するやうな表情が、その眼差しに現はれる）泳ぎといへばだね、お父さんはあの海岸へゆくたびに思ひださずにはゐられないよ——お父さんが赤毛のシスクとあすこで泳いでゐて、あれの命を助けてやつた時のことを。（この時までに、家族のものは、面白がつてこつそりと視線を交はしはじめてゐる。みんなにはこの話の續きがわかつてゐる。）

シッド　（ずるさうな、醉眼朦朧とした目で、みんなに目配せして）ははあ！おい、また始まつたぞ。

ミラー　（彼の方へ向いて）何が始まつたんだ。

シッド　なんでもないよ――泳ぎの話を續けた續けた！――僕にかまはないで。

ミラー　（彼を睨みつけたが――すぐにまた追想的な氣持に襲はれて）赤毛のシスクな――そいつの親父といふのが、今、組合市場の建つてる邊で鍛治屋をやつてたんだが――あいつ、あんまり赤い髪の毛をしてゐるんで、子供仲間ちや赤毛つて呼んでたんだよ――

シッド　（皿に向つて話しかけでもするかのやうに）へへえ、大したもんだ！――少年たちの、好奇心にみちた想像力たるや。

ミラー夫人　（ミラーが今にも爆發しさうなのを見て――巧みに口をはさむ）シッド！　海老をたべておしまひ。よけいなことは言はないで。さあナット、續けて下さい。

ミラー　（相手を辟易させるやうな一瞥をシッドにあたへて――再び始める）そこでだ、今言つたやうに、赤毛と僕はその日泳ぎに出かけたんだ。たしか――か

うつと――赤毛は十四で、僕よりも圖體も大きいし、年もとつてゐたんだ。僕はまだ十二だつたからな。――もう四十五年も昔のことで――あの邊には、その頃は家一軒建つてゐなかつたんだ――ただ、海岸から一マイルばかり沖に、いま丁度警笛浮標（ブイ）のあるところだが、あすこに棒桟（ぼうさん）が一本立つてたよ。（トミーはやつとのことで我慢してゐたのだが、この時、抑へたくすくす笑ひをもらす。ミラーは顏をしかめてじろりと見る）もう一度笑つてみなさい。この食卓におかないぞ。

ミラー夫人　（話を擊退しようとして、素早く口をはさんで）あなた、海老を召しあがつて下さい。ほかのお肴はおあがりにならなかつたんですから。

ミラー　（この注意が氣にくはないので――怒りつぽく）さう一々話の腰を折られちややりきれん――（海老に移つて、しばらく默つて嚙む。）

ミラー夫人　（話題を轉換しようとして）ねえ、ミルドレッド、アンのお母さんのリューマチはどうだつたい。

ミルドレッド　大變いいやうですわ。今日、淺瀬のところを歩いてらしてよ。鹽水が一番いいって言ってらしたわ――關節の痛むのには。

ミラー夫人　とれ、ミルドレッド。不作法な！　食事のとき、そんなお話をするなんて――

ミラー　（再び追想的な思ひに取りつかれて）そこでだね、今言つたやうに、僕と赤毛で泳ぎにゆくと、赤毛の奴、向うの棒杙まで行つて歸る競爭をしようぢやないかつて、僕に挑戰するんだ。何しろその時分は僕にさういふ挑戰をするものは一人もゐなかつたもんだ。僕ときたら元氣一ぱいの少年だつたからね。だから僕は二つ返事で引きうけたね。二人でスタートをきる。力泳また力泳、二人はまさに互角の勝負といふところだ。さつきも言つたやうに、あいつは僕より圖體も大きいし年もとつてゐたんだが、とうと僕の方がすこし引き離したんだ。そこで僕は餘裕綽々、なんら疲勞の色を見せず、樂々と泳いでゐると、突然、うしろの方で何か唸るやうな聲がするんだ――かういふ風に――「助けてくれ」（彼は眞似

てみせる。シッドを除いて、みんなの視線がぢつと皿の上に注がれてゐる）そこで振りかへつてみると、赤毛の奴、顏がすつかり引ッつッて眞っ青になつてゐるんだ。そして、力のない聲でかう言ふんだ。「ナット、助けてくれ！　足がしびれたんだ！」これには驚いたね。全くひやりとしたよ。どうしていいか、咄嗟にいい考が浮ばないんだ。すると、ふと棒杙のことを思ひついたんだ。奴をあすこまで引っぱってゆければ、誰かが見つけてくれるまで、奴をつかまへてゐることができるだらうと、さう思つたんだ。しかし、棒杙までだいぶあるんだ――さうだな、二百フィートはあつたね。

シッド　二百五十フィートだよ。

ミラー　（まごついて）な、なんだって？

シッド　二百と五十フィートだよ。僕はこの三十年間、君が赤毛の命を救ふたびに、距離の長さを書きとめておいたんだが、その棒杙までの平均數を求めると正に二百五十フィートなんだ！（食卓のまはりで、どつと笑ひ聲がおこる。シッド

は不平さうに言ふ）何だつてまた赤毛を溺れさしてやらなかつたんだい、ナット。どんな奴だか知らないが、全く氣にくはん奴ぢやないか。

ミラー　（すつかり感情を害したので、唇のあたりに強ひて薄笑ひを浮べ、これを面白がつて話してゐるやうなふりをして）全くだよ、シッド。あんまりこの話をしすぎるんで、みんなには退屈なんだな。だけど、これは海の中で無鐵砲なことをしちや危險だといふことを證明してゐて、子供にはきはめて爲になる實話なんだよ。

ミラー夫人　（彼の口調で感情を害してゐるのを感じとつて、彼を救ひ出すために）もちろん、いいお話ですわ――お氣に召した時は、いつでもお話になつて下さい。それから、シッド、あなたが正氣でゐる時でしたら、ナットをあんな風にからかふのを、わたしとしちやとうてい默つてゐるわけにはゆきませんよ。

ミラー　（哀しさうな、自己を憐れむやうな微笑を妻に向けて）僕も年をとつたよ、なあ、お母さん――同じことを繰りかへすなんて。誰か止めてくれりやいい

のに。

ミラー夫人　そんなことありませんわ。あなたはまだまだお若いですよ。（再び怒つてシッドに向つて）あんたは海老をたべていらつしやい。さうすりや、口をきかないですむのよ。

シッド　（しばらく嚙んでゐたが――我慢しきれなくなつて）海老か。なあ、トミー、シッド叔父さんが海老を發明した人だつてこと知つてゐるかい。いや、本當だよ。昔――叔父さんがピラミッドをつくつてゐた時だ――一日仕事を休んで、大急ぎで海老を描きあげたんだ。この海老の馬鹿者たるや、叔父さんよりも圖體も大きく年もとつてゐて、眞つ赤な髪の毛をしてゐるんだが、それでも叔父さんはたちまちのうちに描きあげたんだよ。さうだつたな、ナット。（それから突然、小さな見世物の客引の口調で）エイ、お立合ひの皆さま――

ミラー夫人　お願ひ！　默つてゐること出來ないの？

シッド　これなる檻におりまするは海老でござい。お立合の皆さまには、とうて

い御信用なさいますまいが、まことや、これなる興味津々たる貝類は一千年にたつた一度の戀をするだけでございー——ところが、その戀たるや、おやおや、蜜よりも甘いときたねえ！　（子供たち、ワアッと笑ふ。リリーとミラー夫人も我知らず笑ひ出し——それからきまり悪がる。ミラーもはつはつ大笑ひをする——それから、突然、はつとする。）

ミラー　おい、シッド、氣をつけてくれないと困るぢやないか。家庭にゐるんだぜ。

トミー　（突然、叔父さんを驚歎すやうな畏れの目をもつて見ながら、母にしやがれた呼き聲で）ママ！　見てごらんよ！　叔父さんたら、肢も殼もみんな喰べてゐますよ！

ミラー夫人　（ぞつとして）シッド、あなたつたら自殺でもしようつてんですか。リリー、それ取りあげておしまひ。

シッド　（ひどく勿體ぶつて）ところが、わたしは殼が好きなんだ。いやしくも

食道樂で通るほどの者なら殼の方を取りますよ——大味でうまみのない肉よりも。蛤だつて同じです。殼をたべなければ、一種特別の毒があつて必ず中毒する——さうだつたな、ナット。

ミラー　（お人好しらしく）君は僕をかちかふのがよつぽど面白いとみえるね。まあ、いいから、續けたまへ。僕はかまはないから。

ミラー夫人　シッドはしばらくベッドへ行つて、寢た方がいいわ。それにかぎるわ。

シッド　（しかつめらしくこのことを考へながら）ベッド？　さう、その方がいいかもしれない。（立ちあがる）わたしはね、どうも體の調子がわるくて——はなはだデリケートな狀態にありましてね——男の子が生れますやうにとお祈りしてゐるんですよ。ええ、さうだつたね、ナット？　ねえ、ナット、わたしははなはだデリケートな狀態にゐるつて、あなたに一日ちゆう話しつづけてゐるのに、あなたときちや、あのいまいましいチャウダー（貝、魚を主にして、豚肉、野菜などを一

しよにした寄せ鍋」をわたしに喰べろ喰べろと押しつけてばかりゐるんだ――あなたはお腹がすつかりふくれてゐるにしろ、さう押しつけることはないぢやないか――チャウダーには一種特別の油があつて、それが必ず中毒するつてことを、すつかり承知してゐながらさ――（一同、また笑ひ出す――リリーはヒステリカルに笑ふ。）

ミラー夫人　しやうのない人ね、早くお休みになつたらどうなの？

シッド　（おとなしく呟く）はいはい、唯今。おつと、この足ぢや、これが精一ぱいですかね。（ふりかへり、リリーのうしろを通ると、立ちどまつて、彼女をぢつと見おろして）おつと待つたり。まだしなければならぬ用が殘つてゐる。それをすまさぬうちは、今日一日がお終ひにならないのだ。もしリリー殿、やつがれと結婚する氣かどうか、きつぱりとお答へめされよ。

リリー　（ヒステリカルにくすくす笑つて）だめですわ――どうしたつて。

シッド　（うなづいて）よろしい。多分、その方が萬事うまく行くでせう。とい

ふのは、おふくろが臨終のきわに殘してくれた教訓を、いまだに忘れることができません。おふくろはかう言つたのです。「シッドや、お酒のみの女と結婚するんぢやないよ。いいかい。お酒にふれた唇を決してお前の唇にふれさせるんぢやないよ。」（悲しさうに彼女を見つめて）何たる情けないことぞ！　かつてはあのやうに淑かなりし婦人が、今はかかる酒の奴隷たらんとは！　（ナットの方へ向いて）おい、ナット、どうしたらこの御婦人を救ふことができるんだらうな？（しやがれた、内緒話をするやうな囁き聲で）誘惑の魔手をのがれるために感化院へ入れた方がいいぜ。酒の匂ひをかいだだけで、この人つたら氣狂ひになりさうなんだから。

ミラー夫人　（笑ふまいとして一所懸命になりながら）リリーにかまはないで、お休みなさいな。

シッド　しからば御意に從ひ――（リリーの椅子のうしろを廻り、奥の客間の入口の方へ行き――それから突然振りかへつて、敬禮して言ふ）お休みなされ、淑

女――竝びに紳士諸君。やがてまたお會ひ申さう。（救世軍の太鼓の眞似をする）

ブーン！　ブーン！　ブーン！　はらからよ、來りて、救はれよ！（古い救世軍の讃美歌をうたひはじめる。）

ああ　たのし
やがてまた來ん日は
かの美はしき岸邊にて共にまみえん

（振りかへり、歌ひながら奥の客間から眞面目くさつて行進して出てゆく）

働きて　祈れ
いのちある日のかぎり
やがてまた　み空にて共にまみえん

（ミラーも、妻も、子供たちも、ワアワア笑ひこける。リリーはヒステリカルにくつくつ笑ふ。）

ミラー　（やつとおさまつて）はつはつ。何としても變りもんだ。あいつにかかつちや笑はずにゐられないよ――愚弄されてる當人だつて。

ミラー夫人　やれやれ、何て變人なんでせう。ああ、あ、お腹がいたい。一所懸命笑ふまいとしてゐたんですが――どうにも我慢ができないんですもの。本當に、あの馬鹿さ加減つたら！　でも、本當は笑つちやいけなかつたんですわ。あの人をいい氣にさせるだけなんですもの。だけど、どうにも可笑しくて――！

リリー　（突然、椅子から立ちあがつて、こはばつて立つてゐる――顔が痙攣するやうにぴくぴく動く）さうですわ――笑つちやいけなかつたんですわ――それなのに、わたしまでが笑ふなんて――いい氣にさせるだけですわ――だから、あの人、駄目になつてしまつたんです――誰もかれも、いつでも笑つて、誰もかれも、いつでも、變りもんだの、變人だの、面白い人だのと言ふんです――だからあんなになつてしまつたんです――あの人をいい氣にさせたのは――わたしたちみんなに責任のあることですわ――わたしたちみんなが惡いんです――笑ふことしかしないんですもの！

ミラー　（心配さうに）まあまあ、リリー、そんな風に取つちやいけないよ。そんなに重大なことぢやないんだから。

リリー　（苦々しく）いいえ、重大なことですの――多分――わたしには。少くとも一度はさうでした。（それから後悔するやうに）御免なさい、ナット。御免なさい、エシー。こんなこと言ふつもりぢやなかつたんですが――今夜は自分で自分が分らなくなつてゐるんです。わたし、御免蒙つて、しばらく表の客間へ行つて、ソファで休んでゐたいと思ひますわ。

ミラー夫人　ようございますとも、リリー。したいやうにしてゐて下さい。（リリー出てゆく。）

ミラー　（顔をしかめ――すこし恥しさうに）むう！　こりやどうもリリーの言ふ通りだ。それにしても、リリーがあんな風にはつきり意見を述べたことは、今までにないことだよ。何か變つたことでもあつたのかい、エシー。

ミラー人夫　別にこれつてこともないやうですが――ただシッドが花火を見に連

れてゆくつて約束しましたわね。

ミラー　うん、さうだつたな。ぢや、僕が連れてつたらどうだらう。リリーを失望させるに忍びないよ。

ミラー夫人　（頭をふつて）もうかうなつたら、どんなことしたつて行きませんよ、あの人。

ミラー　ふむ。僕はまた、シッドのことなんかとつくの昔にきれいさつぱりしてゐるのかと思つてたよ。

ミラー夫人　それが出來ないんですよ、あの人には。

ミラー　しかし、さうした方がいいんだ。シッドはウオターベリーの仕事を馘になつたんだよ――さつき園遊會で、酒の勢ひで僕に打ちあけたんだがね。

ミラー夫人　まあまあ！　何て意氣地のない。

ミラー　うちへ歸つてきたとき、どうも樣子が變だと思つてゐたんだ。なに、またうちの社で椅子を見つけてやるさ、もちろん。この町ぢや、何といつてもシッ

ドほどの腕つときの探訪記者はゐなかつたんだ。だが、例の馬鹿だけは止めても らはないと困る。それはよく話しておかう。

ミラー夫人　（危ぶむやうに）さうねえ。

ミラー　まあ、すんだことはすんだことだ。ここに坐つてくよくよしてゐたつて 始まらない。（立ちあがる。リチァード、ミルドレッド、トミー、ミラー夫人もそ れにならふ。子供たちはおとなしくし、すこしおどおどしてゐる）子供たちは庭 へ出て、しばらく靜かにしてゐなさい。シッド叔父さんがよく眠り、リリー叔母 さんが休めるやうに。

トミー　（悲しさうに）ねえ、パパ、空のロケットやローマの蠟燭あげないの？

ミラー　あとだ、あとだ。花火をあげるにはまだすつかり暗くなつてゐないぢや ないか。

ミルドレッド　いらつしやいよ、トミー。ねえ、パパ、トミーが靜かにしてゐる やうに、あたし見てゐるわ。

ミラー　さうかい、そりやいい子だ。（ミルドレッドとトミーは仕切戸から出て ゆく。リチァードは苦々しく陰鬱な物思ひに沈んで、突つ立つたままである。ミ ラーは彼を見て、いらいらした調子で）おい、憂鬱なハムレット、何をしてゐる んだい。

リチァード　（陰氣に）外出しようと思ふんです——しばらく。（それから突 然）僕、何を考へてゐるか分りますか。シッド叔父さんが駄目になつてゆくの は、リリー叔母さんのせいです。だつて、叔父さんがリリー叔母さんを愛してゐ るからこそ起ることなんです。叔母さんたら、叔父さんを引きずり廻し、叔父さ んをけしかけ、その生涯を目茶苦茶にしてゐるんだ——女なんてみんな、男の一 生を破滅させるのが好きなんだ。僕は叔父さんがお酒のために死んだつて、批難 する氣にはなれませんよ。叔父さん、あんな風にあつかはれたら、死ぬことなん か何もと思はないでせう。僕にしたつて、叔父さんの立場になつたら、同じこと をやりますよ。

ミラー夫人　（怒つて）リチァード！　そんなこと言ふのはお止し！

リチァード　（苦々しく引用する）

飲めよ！　汝、いづくより、なぜに來たりしか知らざれば。

飲めよ！　汝、なぜに、いづくへゆくか知らざれば！

ミラー　（癇癪を起して――荒々しく）おい、若いの。僕は一日ちゆうお前の馬鹿々々しい考に我慢できるかぎり我慢してきたんだぞ。お前は年のわりに生意氣になりすぎてやしないか。さういふ馬鹿げた言ひ草はお前の胸にしまつておけ。いいか。でないと、後で悔むやうなことになるぞ。氣をつけろ、これから！

（ぷりぷりしながら、大股に歩いて奥の客間から去る。）

ミラー夫人　（まだ怒つてゐる）リチァード、お母さんはお前が恥しいよ、お前が。（夫のあとについて去る。リチァードはしばらく、苦々しい思ひで、屈辱をかんじ、傷つけられた氣持で立つてゐる。親父さへ敵になつたので、その顏はますます反逆的になる。それから、強ひて唇のあたりに嘲笑を浮べる。）

リチァード　ふん、何だつて構ふもんか。みんなに思ひ知らしてやるぞ！（振りかへつて、仕切戸から出てゆく。）

――幕――

第三幕

第一場

小さなホテルにある酒場の奥の部屋。――小さな薄汚い部屋で、天井の中央からさがつてゐる蠅糞のしみのついた鍍金のシャンデリアの、やはり蠅糞のしみのついた二つの電燈で、ぼんやり照されてゐる。左手前方に酒場へ通じる自在戸。その戸の奥寄りに、壁にくつつけて、五セント白銅を入れると自動演奏するピアノがおいてある。正面の壁の右手にある戸口は、「家族入口」と二階の部屋へゆく階段とに通じてゐる。右手の壁の中ほどに窓が一つあつて、鎧戸がおろしてある。上つ面を着色したテーブルが三つ、中央前寄り、右手後寄り、後景中央にあつて、そのまはりにはそれぞれ四つの椅子がおいてある。眞鍮の唾壺がそれぞれのテーブルのそばの床においてある。床は掃除してないので、紙卷や葉卷の吸殼がちらかつてゐ

る。氣持のわるい鮮橙色の壁紙はしみがつき汚れてゐる。

同じ夜の十時頃である。リチァードとベルが中央のテーブルにむかつて腰かけてゐる。ベルはテーブルの左側の椅子に、リチァードはテーブルの向う側の中央にあつて、ベルのすぐ隣りになる椅子に、こつちを向いてかけてゐる。

ベルは二十歳で、過酸化でもしたやうな白い皮膚と明るい金髪の娘。その時代の大學生相手の典型的な「情人」(淫賣)で、それをいくらか安つぽくした變り種で、けばけばした見かけだけの服裝をしてゐる。しかし、彼女はつい最近さうした階級に身をおとしたばかりの新米なので、その化粧やいけ圖々しくて無頓着な態度の背後には、いくらか良心に恥じてゐるところがある。

ベルの前には飲みほしたジン・リキー〔ジン酒を橙の果汁や炭酸水などに混合したもの〕のグラス、リチァードの前には半分飲んだビールのグラス

がおいてある。彼は恐ろしく臆病な、きまり悪さうな、うしろめたいやうな様子をしてゐるが、同時にスリルを感じ、心とろかす遊蕩三昧の生活に足をふみいれたことを誇らしく思つてゐる。

自動ピアノが「ベデリア」を奏してゐる。バーテンは若い頑強なアイルランド人で、狐のやうにずるいが間のぬけた顔をしてゐて、いつも冷笑するやうな利巧ぶつた薄笑を浮べてゐるが、酒場の入口のすぐ内側のところに立つて、自在戸ごしに二人を見てゐる。

ベル　（彼女のお供の方をいらいらしたやうにちらと見て――空になつたグラスの氷をがちやがちやならしながら）そのビール、のんちやいなさいよ。なぜつまないの？　氣がぬけちやふわよ。

リチァード　（きまり悪さうに）わざとさうしてるんだよ。僕は氣のぬけた方が好きなんだ。（しかし、いそいでビールの残りをいやな味のする藥ででもあるかのやうに、ぐつと飲みほす。バーテンは聞える位の聲でくすくす笑ふ。ベルは彼

をちらと見る。）

ベル　（輕蔑するやうに自動ピアノを顎でさして）ねえ、ジョージ、「ベデリア」がこの田舍町で最近ヒットしたものなの？　さうね、古いって言っても、二年ぐらゐおくれてるだけだけどね。すぐ流行に追ひつけるわよ。なぜその古い箱に新しいレコード入れないのさ。

バーテン　（にたりとして）文句は親爺に言つていただますかね。わつしちやお門違ひだ。なにせ、こういちや、あんたのやうな氣のきいたお若いのは來ませんからね――來りや、時勢におくれないやうにやりまさあね。

ベル　（彼に職業的なあだつぽい笑ひをみせて）からかつちやいけないわよ、どうぞね。からかはれるの我慢ができないわ。（ピアノの音樂に合せて歌ふが、今はその目をリチァードに注いでゐる）「ベデリア、わたしやお前にさわつてみたい。」（バーテン笑ふ。彼女はリチァードにたりと笑ふ）ねえ、今の文句、音樂に合して歌ふの聞いたことあつて？

リチァード　（聞くには聞いたことがあるが、若い娘がそれを口にするのを聞いてびつくりして――しかし、遊蕩に疲れたやうな態度を裝つて）あるとも、度度。この歌、もう古いよ。

ベル　（椅子をすりよせ、彼の手に片手をのせて）それがどういふことだか分つてゐるんなら、どうしてさういふ風にしないのさ。

リチァード　（すつかりまごついて）うん、僕あね、その古い替へ歌を何度もきいたことがあるよ。僕をどういふ人間だと思ふんだい。

ベル　わかんないわ。正直なとこ、迷はせるわね。

バーテン　（嘲けるやうにくつくつ笑つて）そのかたは一流の遊び人だよ。わかんないんですかい。わつしやこんな金使ひの荒い方は見たことがないよ。あんたがたにお酒をはこぶんで、こつちの頭がふらふらしまさあ。

ベル　（いらいらしたやうに笑つて――リチァードに）駄目よ、あの男にからかはしちや。鼻をあかしておやりよ。どう、氣前のいいところ見せて、もう一ぱい

取つちや。

リチァード　（屈辱を感じ――男らしく）さうしよう。御免ね。僕、ほかのこと考へてたもんだから。好きなのお取りよ。（酒場からはいつてきたバーテンの方へ向いて）この御婦人のお好きなものをきいて――それから、僕にも何か見はからつて持つてきてくれ。

バーテン　（テーブルのところへ來て――ベルに目配せして）といつあ話せらあ。だから、あなたを遊び人だと申しあげたんでさあ。あなたには葉巻をお持ちしませう。（ベルに）ハイカラさん、あなたは何にしますね――同じでようございますか。

ベル　いいわ。ただね、今回はホテルの規則はしまつといて、リキーにはジンがはいるもんだつてことを忘れないでね。

バーテン　（にたにたしながら）へえ、ようがす――なにせあんたのこつですから。（それからリチァードに）あなたは何になさいますか――ビールのお代り？

リチァード　（内氣に）小ちやいのくれたまへ。僕、のどが渇いてゐないんだ。

ベル　（計畫的に罵倒する）へん、ハーヴァードぢや萬事そんなにのろくさいの？　全くよ。これがニュー・ヘヴンだつたら、あんたなんか幼稚園に入れられちまふわよ。駄目ぢやないか、そんな意氣地のないこつちや。ビールをがぶがぶ飲んぢや、睡くなるだけよ。男の飲みものをおやりよ。

リチァード　（恥しさうにして）さうしよう。僕、さうしようと思つてたんだ。僕にスロー・ジン・フィズをもつてきてくれ。

ベル　（バーテンに）本物にとさへてね。

バーテン　（目配して）言ふにや及ぶだ。この方をのぼせあがらせるやうな奴をッてんでせう、ええ？（くつくつ笑ひながら酒場へ行く。）

ベル　（部屋を見廻し――いらいらしたやうに）畜生、何てくだらないとこなんだ！（リチァードはこの罵倒にどきりとし、ショックをうけ、テーブルへ目を落す）こんな活氣のない街にぶつかるなんて初めてだ。きつと九時すぎると往來を取りこんぢまふんだわ。（それから、彼の方へ向いて）ねえ、坊や、正直いつ

て、お母さんあんたの外出してるの知つてるの？

リチァード　（身を護るやうに）おい、やめてくれ。何だつてやめないんだ――僕をからかふのを。

ベル　（彼をぢろりと見て――それから、新方針に出ようと決心して――彼の手をかるくたたきながら）やめるわ。あたしね、そんなつもりで言つたんぢやないのよ。お願ひだから、辛くあたらないでよ。

リチァード　僕、辛くあたつてなんかゐないよ。

ベル　（迷はすやうに）ねえ、あたしはかう思つてるのよ。あんたはね、あたしがこれまで會つたうちで一番可愛い男の子のひとりよ――だからね、あんたがそんなに冷淡によそよそしく振舞はないでさ――ちよつとしたチャンスでもあたしにみせてくれりや、あんたがとても好きになれるだらうと思ふわ。

リチァード　冷淡でよそよそしいなんて、僕、そんなことないよ。（それから眞面目くさつて悲劇的に）さうだとしたら――僕が心に重荷をもつてゐる――その

せいだよ。

ベル　（ぢれつたさうに）ぢや、その重荷つてのを取りのけて、何かほかのことを考へるやうにしたらいいぢやないの。（バーテン、酒をもつてはいつてくる。）

バーテン　（それをテーブルの上において――ベルに目配せして）こいつあ、あんたのためにこの方をのぼせあがらせてくれますよ。四十セント――葉巻のお代も一しよで。

リチァード　（札束を引き出し、一ドル紙幣を手渡して――大袈裟に無頓着な態度を裝ひ）おつりはいいよ。（ベルは一息喘いで、抗議しようとしたが、思ひなほす。バーテンは一瞬間この好運を信じることができない――それから、リチァードの心が變るのを恐れでもするかのやうに急いで紙幣をポケットへいれる。）

バーテン　（聲に尊敬の念をこめて）どうも有難うございました。

リチァード　（鷹揚に）なに、いいよ。

バーテン　このお飲みものお口に合ひますやうに。特別骨を折つてつくつたんで

すが。（今しも酒場へはいつてきた外交員の聲がする。「おい、誰かゐないのかい。」それから酒臺に銀貨をばしやりとおく音がする）へい、唯今。（バーテン、出てゆく。）

ベル　（自分のお供にそんな能力があつたのかと、今さらのやうに感心した聲で、やさしく諫める）あんな氣前のいいことしちやいけないわよ。癖になつてよ。十セント銀貨の一枚もやればたくさんなのに。

リチァード　なに、いいんだよ。僕はけちん坊ぢやないんだ。

ベル　さう、さういふ話ききたいのよ、あたし。（素早く、ちらと酒場の方をみて、こつそり着物の裾をまくりあげる――リチァード、はつとして心を奪はれる――そして、靴下から安煙草を一箱取りだす）坊や、あのバーテン見張つてね、やつてきたら敎へてよ。女は二階の部屋以外ぢや煙草を吸つちやいけないんですつてさ。あいつさう言ふのよ。

リチァード　（當惑したが）うん。見張つてゐよう。

ベル　（煙草に火をつけ、深く吸ひこんでから、煙草の箱を彼にさしだして）ス
ウィート一本どう？　のむんでせう。
リチァード　（一本取つて）のむよ。もう二年前からのんでゐるんだよ――こつ
そりと。だけど、來年からは公然とやれるんだ――パイプも葉巻もね。（ひどく
苦心して無雜作に火をつけ、ふかすが、深く吸ひこまない――それから、はつと
して氣にかかるやうに彼女を見ながら）おい、そんな風に吸つちやいけないよ。
とにかく、煙草は女の子には恐ろしくいけないんだぜ。かりに――
ベル　（冷笑的に面白がつて）おやおや、あたしの大きくなるのの害にでもなる
つて言ふの？　へえ、面白いわね、坊やつたら。今に大きくなつて牧師にでもな
らうつてえの。（リチァード、恥しさうな顔をする。ベルはぢれつたさうに彼を
ちつと見て――それから飲みものを取りあげる）さあ、乾盃！　いい、すつかり
飲みほすのよ！　お酒の飲みかた本當に知つてるのかどうか見せて頂戴。あんた
の言ふ心の重荷が取れるわよ。（リチァードは彼女にならひ、二人はグラスの中

味をすつかり飲みほして、それからグラスを下へおく）そうら！　ちよつとした
氣持でせう。氣分いい？
リチァード　（自分を誇らしげに感じ――内氣な微笑をもらして）うん、たしか
にね。
ベル　しばらくすると、もつといい氣持になるわよ――そしたら、そんなによそ
よそしく不親切にしなくなるでせうねえ？
リチァード　僕、よそよそしくしないよ。
ベル　いいえ、よそよそしいわよ。きつとあたしが好きぢやないんでせう。
リチァード　（前よりも男らしく）僕、君が好きだよ、本當に。
ベル　どの位？　とても。
リチァード　うん、とても。
ベル　ぢや、どの位好きだか見せてよ。（それから、リチァードがきまりわるさ
うにもぢもぢしてゐるので）あんたの膝に腰かけたいんだけど、困る？

リチァード　ううん――僕――（彼女はそばへ來て、彼の膝にかける。彼はひどく困つて氣持惡るさうにみえるが、ジンが次第に頭へあがつてきたので、自分を誇らしげに感じ、惡魔的な氣持にさへなる。）

ベル　どうしてこの手であたしを抱かないのさ。（彼はぎごちなくさうする）駄目ぢやないの、そんなおつかなびつくりぢや。ぎゆつと抱くのよ。あたしが痛がりやしないかと心配しなくたつていいのよ。あたしはね、ぎゆつと抱かれるのが好きなの。あんたはどう？

リチァード　うん、僕だつて。

ベル　あんたみたいな可愛いい坊やに抱かれる時は、ことにね。（彼の髪の毛をくしやくしやにしながら）ふん、きれいな髪してゐるわね。自分で知つてるの？あたし、あんたにすつかり首つたけ。本當よ。あんたの方でも、どうしてあたしにさうなれないのさ。あたし、そんなに見つともなくないでせう、ええ？

リチァード　うん、君は――君はきれいだよ。

ベル　心ぢやさう思つてゐないやうな口のききやうするわね。

リチァード　いや、さう思つてゐるんだよ――本當に。

ベル　ぢや、なぜあたしにキスしないのさ？（彼女は顏をさげて自分の唇を彼の唇の方へ持つてゆく。彼はためらひ、それから接吻し、すぐにしりごみする）それがキスなの？　さあ。（彼の頭を抱き、唇を押しつけ、そのままにしてゐる。彼はびつくりして身をもがく。彼女は笑ふ）どうしたの、可愛いい坊や？　こんな風にキスしたことないの？

リチァード　あるよ。度々。

ベル　ぢや、なぜあたしが嚙みつきでもしたやうに飛びあがつたのさ。（彼の膝の上で體をゆすつて）よう、あたし、あんたにすつかり夢中になつちまつたわ。どうしたらいいの、ええ？　話して頂戴。

リチァード　僕――わかんないよ。（それから大膽に）僕――僕だつて、君に夢中なんだ。

ベル　（また彼に接吻して）ねえ、イディスとあんたのお友だちのウィントが二階でどんなすばらしい時間を送つてゐるか考へてごらんよ――あたしたち二人、死んだ者みたいに、ここに坐つてる間にさ。一部屋たつた二ドルよ。それに、あたし、あんたがこんなに好きなんだから、五ドルでいいわよ――あんたには。そりやね、ただでもいいのよ――あんたには――だけどさ、あたしだつて暮らしてゆかなくちやならないし、ニュー・ヘヴンの部屋代だつてあるしさ――それはあんたにだつて分るでせう。あたし、ほかの人だつたら誰でも十ドルいただいてゐんの。本當よ！　（また彼に接吻し、膝から立ちあがつて――活潑に）さあ、いらつしやい。向うへ行つて、バーテンに部屋が要るんだつて言つてらつしやいよ。急いで。あたし、ほんとにさ、あんたに首つたけになつちやつたんで、二階へ行くのが待ちきれない位よ。

リチァード　（自動的に酒場の戸口へ行きかけたが――それから、ためらふ。心の中に大きな闘争がおこつてゐる――臆病さ、金が土臺になつてゐることに對す

る厭悪、衝動をうけた純情、ミューリエルにたいする疾しい思ひなどが、次第に高まつてくる酩酊の氣持と最後まで闘つてゐる。その酩酊の氣持たるや、彼をして極道者になつてあらゆる禁斷の木の實を求めて突進したいやうな氣を起させ、さらに、この淫賣を彼の目にロマンチックで邪悪なヴァンパイアとして映ぜしめるのである。終に、彼は立ちどまつて、混亂して呟く）僕にはできない。

ベル　どうしたの？　恥しくて部屋の申込みができないの？　ぢや、あたしがやるわ。（戸口の方へ行きかける。）

リチァード　（必死になつて）いけない――僕、さうしてもらひたくないんだ――さうしたくないんだ。

ベル　（彼をじろじろ見てゐたが、怒りの色がその目に現はれてくる）ふん、あんたみたいな下劣な安つぽい嘘つきないわよ！

リチァード　安つぽい嘘つきなもんか、僕！

ベル　へん、何さ、あたしをこんなところに一晩ぢゆう引きとめて、馬鹿々々し

いお相手をつとめさせるなんて――今ごろぴちぴち意勢のいいのと一しよにゐられたかもしれないんだよ――この町にそんなのがゐればの話だがね――へん、それが今になつて、何だい、あたしを棄てるなんて！　駄目ぢやないか、そんなけちん坊ぢや。あんた、五ドル持つてるでせう。さつきお酒の代拂ふとき見て知つてるわよ。あたしには嘘は通用しなくてよ！

リチァード　僕――僕、持つてゐないつて、誰が言つたい？　それに、僕、けちん坊ぢやないよ。君がそんなに五ドル必要だといふんなら――部屋代や何かでさ――君、何しなくつてもお金とつていいよ――つまりその、僕、よろこんであげるよ――（ポケットをさぐつてゐたが、九ドルの札束を引き出して、五ドルを彼女にさしだす。）

ベル　（自分の目を信じかねる樣子で、彼の手からそれを引つたくらんばかりにして取る――それから、笑つて、センチメンタルに感謝の氣持になる）有難うよ、坊や。まあまあ――ほんとに有難いわ――癇癪おこして、あんたを怒鳴りつ

けたりして、御免ねえ。いい？　まあ、あんたつたら、掛値なしにいい人だわ！　あんたみたいないい人初めて！（彼に接吻する。彼は誇らしげににたりとし、今やいろいろの理由からしてひとりで英雄的な氣持になる）まあ、いい人ね、あんたは！　ほんとに有難うよ。

リチァード　（鷹揚に――そして、すつかり酩酊して）そんなこと――何でもないさ――悦んでもらへて何よりだよ。（それから大膽に）さあ、もう一遍キスしてくれよ。それで、僕にお返ししたことになるよ。

ベル　（彼に接吻しながら）お望みなら千遍だつてキスしてあげるわよ。さあ、坐りませうよ。そして、もう一ぱい飲まうぢやないの？　――今度はあたしがおごるわ、感激のしるしにさ。（呼ぶ）ちよいと、ジョージ！　二人にお代り持つてきてよ――同じの！

リチァード　（用心する氣持が殘つてゐて）僕、そんなに飲んでいいかどうか――

ベル　あら、大丈夫よ、もう一ぱいぐらゐ。それに、あたしおごりたいのよ、ね

え。（二人は以前の位置に腰をおろす）

リチァード　（大膽に自分の椅子を引きよせ、片手で彼女を抱き――酩酊した様子で）僕、とても君が好きだよ――君といふものが段々わかつてきたから。君は本當にいい子だね。

ベル　いい子だなんて結構だわよ。何とかほかに言つてよ！　だつてさ、あたしがいい子だつたら、なぜあたしを二階へつれて行く氣にならなかつたの？　そこんとこ、あたしにはどうしても分んないわ。

リチァード　（大膽に嘘をついて）僕、さうしたかつたんだよ――ただ僕あね――（それから、眞面目くさつてつけ加へる）僕、しないつて誓を立ててゐるんだ。（バーテン酒をもつてはいつてくる。）

バーテン　（それをテーブルにおいて）へい、御注文が參りましたよ。（リチァードの手が彼女の腰を抱いてゐるのを見て）ほうほう、だいぶ御發展ときたね。（リチァードはどろんとした目つきで彼ににやにやする。）

ベル　（靴下をさぐつて、彼に一ドル與へる）はい。これはあたし。（バーテンがお釣をわたすと、彼女は十セント銀貨のチップをやる。バーテン、出てゆく。彼女はリチァードからもらつた五ドルを靴下へいれ、それからグラスをとりあげる）さあ、乾盃――もう一遍言ふけど、有難うよ。（彼女は一口なめる）

リチァード　（騒々しく）すつかり飲んだり！　すつかり飲んだり！（自分の分を飲みほして、誇張した滿足の溜息をつく）ほう、こいつあうまい。全くうまい。（彼女を抱きしめて）もう一遍キスしてくれよ、ベル。

ベル　（彼に接吻して）さつきあんた、しないつて誓つたつて言つたわね。どういふ意味？

リチァード　（眞面目くさつて）僕、純潔を守るつて誓つたんだ。

ベル　（皮肉に）死が二人を引きはなすまでは、つて奴？　誰さ、相手は？

リチァード　（そつけなく）いいよ、そんなこと。

ベル　（むつとして）あたしには、その人のこと話す資格ないつて言ふの？

リチァード　ううん、そんなつもりで言つたんぢやないよ――僕。君は別に悪いつてわけはないさ。（それから、酔つぱらひ特有の大眞面目で）ただね、君はかういふ種類の生活を送るべきぢやないよ。こんなことよくないよ――君のやうないい娘には。なぜ改めないのさ。

ベル　（鋭く）そんな話なんになるの。よしてよ。あんたはね、五ドル出せば、あたしをどうしたつていいさ――だけど、あたしをため直すことは出來ないんだよ。よけいなお世話だよ、坊や。たのまれもしないことに嘴をつつこむんぢやないわよ！

リチァード　僕――僕、何も君の感情を害さうと思つて言つたんぢやないんだ。

ベル　そりや分つててよ。そりやあね、言つてること聞いてると、別に悪氣があつて言つてるんぢやないつて人大勢ゐるけど、あんたもつまりそれね。（話題を變へて）それで、あんたはたつたひとりの戀人のために、純潔を守つてゐるの？（醜い嘲笑を浮べて）ところが、その人どうなの？　きつと今ごろ、どつかの茂

みの中に、男の子と一しよにゐてさ、言ひなり放題になつてるかもしれなくつてよ。駄目よ、お人好しぢや。小つぽけな蠅だつてそれぐらゐのことやるわよ。

リチァード　（椅子から立ちあがつて――憤然と）何を言ふんだ！　止せ、そんなことと言ふのは！

ベル　（平然として――冷笑するやうに肩をすくめて）はいはい。御勝手になさいました。間抜けなお人好しでいらつしやいました。あたしには關係のないことでございますからね。

リチァード　君はその娘を知らないからだ。でなきや――

ベル　知りたくもございませんよだ。そのひとの話よして頂戴、よせないの？

（彼女は苦々しげに前方をぢつと見詰める。リチァードは陰欝に顔をしかめて默りこむ。今や彼が刻々に酩酊の度を加へてくるのがはつきり感じられる。バーテンと外交員が自在戸のすぐ向う側に姿を見せる。バーテンは外交員に目配せして、ベルにうなづいてみせる。外交員はにたりとして、部屋へはいつてくる。手

にハイボール〔ウイスキーをソーダ水に割つたもの〕をもつてゐる。彼は頑丈な、顎骨の突つ張つた男で、四十に近く、安手ではあるが小綺麗な身なりをし、職業からくる快活さをもち、この種の人間特有の剽輕ではつたりをきかした樣子をしてゐる。ベルは彼がはいつてくると顏をあげ、二人はおたがひの意中を完全に讀みとつた視線をかはす。彼女は彼のやうなタイプを空で知つてゐるし、彼も彼女については同樣である。)

外交員　(彼女のそばを通つて、右手のテーブルへ來て――にこにこしながら)今晩は。

ベル　今晩は。

外交員　(腰をおろして)折角のおたのしみのところをお邪魔して、いやどうも――何しろあのバーに立つてると、この兩足がくたびれるもんですからね。

ベル　あたしは構ひませんわ。(リチァードにむしろ輕蔑するやうな視線を投げて)別におたのしみつてわけぢやないんですの。

外交員　ふん、そいつぁ有望だね。

リチァード　(突然、感傷的に朗讀する)

彼女を心から愛してゐたので、そんなことをする氣はなかつたのだ。
しかし、彼女のおかげで女といふものを知つたのだ。

(顏をしかめて外交員の方へ振りむき――それからベルに)おい、もう一ぱい飲まうよ。

ベル　いい加減あがつたんぢやないの。(リチァードは默りこんで、何か呟く。)

外交員　何だい、これ――少年詩人かい。それとも少年俳優かい。

ベル　わらんないのよ。迷つちやつたわ。

外交員　どうだい、さういふ赤ん坊を誘拐するやうなことやめることができるんなら、僕たちちよつとしたことができるんだがな。

ベル　お安い御用よ。ちよいと肱鐵にすりやいいんだから。(リチァードの腕をゆすつて)もし坊や。今ね、あたしの古くからのお友だちで、ニュー・ヘヴンの

スミスさんてえのがいらしたのよ。あたし、しばらくその方のテーブルへ行きますよ。だから、あんた、おうちへお歸りになつた方がいいわ。

リチァード　（彼女を瞬きしてみて、顏をしかめながら）誰がうちなんか歸るもんか。みんなに、鼻をあかしてやるんだ。

ベル　ちや、御勝手に――ただね、あたしを放してよ。（自分を抱いてゐる彼の腕をふりはなして、外交員のそばへ行つて坐る。リチァードは腹を立てて、彼女のうしろ姿を睨みつける。）

リチァード　行け行け。君が何をしようとへいちやらだい。（侮蔑するやうに朗讀する）「女は所詮女にすぎぬが、葉卷のいいのは思ひのままの煙になる。」

外交員　（ベルが自分のそばに坐つたので）よう、ねえさん、ビールは何にするね、種類は？

ベル　あたし、ジン・リキー。

外交員　おやおや、これは贅澤なお好みで。いや、どうも。

リチァード　（沈痛に朗讀しはじめる）

それどころか、どの男も己が愛するものを殺すのだ。

どの男からもこのことを聞いてみるがいい。

外交員　（にやにやしながら）よう、いい聲だぞ。（彼を聲援する）若いの、そいつあ、あまい麻醉劑だ。もつとやつてくれ。

リチァード　（彼を無視して――さらに技巧的につづける）

或るものは苦き目差しもて

或るものはへつらひの言葉もて殺し、

卑怯なる者はくちづけもて

勇ましき者は劍もて殺す！

（彼はベルを憂鬱に睨みつけて、悲劇的に呟く）僕はキスでもつて殺したんだ。

僕は卑怯者だ。

外交員　味をやるねえ、坊や。いいぞ、いいぞ、なかなか調子がいいぞ。もう一

つやつてくれ――今度はホームの眞上をヒユツと飛ぶやつを！

ベル　（笑つて）ガーヴと行きなさいよ。

リチァード　（恐ろしい顏で彼女をにらみつけ――悲劇的に）

幽靈は叫んだ、「おお、世界は廣い、

だが、械をはめられた肢はびつこを引く！

一度、二度、骰子を投げるのは

男らしい遊びだが、

淫蕩のかくれ家で

罪をもてあそぶ者に勝利はない！」

ベル　（怒つて）止せ！　そんなたわ言をやめて、靜かにして頂戴！

外交員　（嘲笑するやうに）あんたのこの娘さん、詩がお分りにならないのさ。

低級だからねえ。だが、わつしはね、詩がちやんと分る人間なんだ。わつしの第

二の名はケリーにシーツさ。〔正しくは Shelley に Keats なのを、この二人の

詩人の名をごつちやにして Kely に Sheets と言つたのである〕おい、同じ奴

をもつとやつてくれ。君は「海老と利巧な男」ってえのを知ってるかい。（ベルの

方へ向いて、眞面目に）からかつてるんぢやないんだよ。そいつあ素敵な歌だ

ぜ。わたしはポリ〔ナイトクラブか〕でそいつを歌ふのを聞いたことがあるんだ。

多分、その馬鹿もそいつを知つてるんだ。坊や、知つてるかい。（しかし、リチ

ァードは返事をしないで、彼を陰鬱に睨みつけるだけである。）

ベル　（リチァードを馬鹿にしたやうにじろじろ見て）あの子、すつかり醉つぱ

らつてんのよ――へん、大して飲みもしないのに。

リチァード　（突然――一さう悲愴な調子で）「それから――十時になると――

アイレルト・レエヴボルクさんが來ますわ――葡萄の葉を髪にさして！」

ベル　それがあんただつたら、氣が狂つたのかと思つてよ。

リチァード　（苦々しく彼女を眺めて――それから戰ひを挑むやうに立ちあがり

――外交員に）この人、ニュー・ヘヴンであなたの知合ひだなんて、そんなこと

誰が信じるもんか。あんたはたつた今、この女を拾つただけさ。この人にかまはないでくれ。いいか。この人に變な眞似をしないでもらいませう――僕がここにゐて、この人を保護してゐる間は、そんなことをさせるもんか！

ベル　（笑ひながら）おやおや！　ちよいとお聞きよ。

外交員　しいつ！　こいつあ面白い。待つた待つた！（誇張したメロドラマの調子でリチァードに話しかける）やい、呪はれてあれ、この色盲め。もしこの女を手渡さぬ時は、何といたす？

リチァード　（威嚇するやうに）君の鼻つ柱にぐわんとパンチをくれてやらあ。それだけさ。（彼は二人のテーブルの方へ進みよる。）

外交員　（にせの恐怖を裝つて――つくり聲で叫ぶ）助けてくれい！　助けてくれい！（バーテンがちりぢりした樣子ではいつてくる。）

バーテン　おい。騒ぐのはよしてもらはう。一體全體、何があつたんだ。

リチァード　（醉つぱらつてゐる）あいつ――生意氣なんだ、あんまり！

外交員　（目配せして）この人、わたしを殺さうとしたんだよ。（それから、リチァードを追つ拂ふ小ざかしい考を思ひついて――バーテンに向つて眞面目に）ねえ、君、こいつあわたしの知つたことぢやないがね、もしわたしが君の立場にゐるとしたら、この若い醉つぱらひに玄關拂ひをくはせるねえ。だつて、この大將、丁年未滿ぢやないか。どんな馬鹿がみたつて、それぐらゐ分らあね。

バーテン　（うしろめたい樣子で）この人、十八歳過ぎてるつて言つたんですがね。

外交員　なるほど。だが、わたしがかりに法王樣だと言つたところで――君はそれをそのまま信じなきやならんわけはあるまい。もし君がいざこざ起したくないんなら、惡いことあ言はない、その小僧つ子をどつか他の銘酒屋へ追ひやつて、何か悶着がおこつたら、そつちで嘘をつかせるこつたね。

バーテン　ふん。（怒つてリチァードの方へ向いて、彼を一突きつく）おい！　歸つてもらはう！　ここで悶着おこしてもらひたかないんだ。さあ、出てゆけ！

リチァード　出てゆくもんか！

バーテン　なに、出てゆかない！（もう一度突いたので、リチァードは打つ倒れさうになる。）

ベル　（冷淡に）無錢飲食でもつまみ出すやうにつまみ出しておしまひな。そいつのたわ言にはうんざりしちやつたよ。（リチァードは荒々しく振りむいて、バーテンにパンチを喰はせようとする。）

バーテン　（パンチを避けながら）おう、やる氣か。よし。（リチァードの首つ玉とズボンのお尻をつかんで、體裁も何もあつたものでない、ぐんぐん自在戸の方へ押してゆく。）

リチァード　放せ、この下劣な卑怯者！

バーテン　靜かにしろ――でないと、顎にグワンと一突きお見舞申して、のしちまふぞ！（リチァードを仕切戸から押し出す。しばらくして、外の戸が前後に搖れる音がきこえる。）

外交員　（くつくつ笑つて）どうだ、思ひ知つたか。へん、どんなもんだい、奴を追つ拂ふこの手際のよさは？

ベル　（突然センチメンタルになつて）可哀さうに。ちやんとうちへ歸れますやうに。あたし、あの子好きだつたわ――あんなに醉つぱらふ前は。

外交員　誰だい、あれ？

ベル　あたしのお友だちと二階に一しよにゐる男の子が、何とか言つてたけど、あたしよく耳に留めてゐなかつたの。名前はミラーとか言つたわ。何でもあの子の親爺さん、この小つぽけな町で新聞を經營してるとか、言つてたやうだわ。

外交員　（口を鳴らして）ひゆう！　ちや、ナット・ミラーの伜だ、きつと。

バーテン　（酒場から戻つてきながら）あいつ歸つて行きましたぜ――お尻をうんと蹴飛ばしてやつたから、さぞかし歸りよかつたでせうよ。

外交員　（惡意のあるくすくす笑ひをして）さうかい？　ちや、蹴飛ばしたおかげで、君はことによると馘かもしれないぜ。「地球（グローブ）」を經營してるナット・ミラ

ーを知つてるかい。奴の仲だ。

バーテン　（がつくりして）あん畜生！　誰がさう言つたんだ。

外交員　このお人形さんだよ。（立ちあがつて）おい、あいつの跡をつけて——ちやんと市内電車にのるかどうか見てくるぜ。ナット・ミラーときちや油斷のならないお人だからなあ。（急いで出てゆく。）

バーテン　（憎々しげに）畜生、何てめぐり合せだ！　おれがあいつの子仲に酒をのましたのが分つたら、あいつおれをこの町から追ん出しやがるだらう。（ベルに向つて怒りたけつて）やい、何だつて敎へないんだ。この虱たかりの宿無しめ！

ベル　べん、そんな言ひぐさ我慢ができないねえ——お前のやうな田舍もんのビール注ぎが何さ。

バーテン　（怒りたけつて）我慢ができねえ。できねえつてのか。あのフイズに思ひきり強いのを入れてあいつに渡せつて言つたのは、一體誰なんだい。（彼女の

椅子をぐいつと押したので、ベルは床へ轉がりさうになる）おい、出てゆけ——さつさと出てゆけ——さもないと、角のお巡りを呼んで、淫賣のかどで拘引させるぞ。（彼女を突いて家族入口の戸口へ押しやる）やい、こつから出てゆけ——ぐづぐつするこたあねえよ。

ベル　（戸をあけて出てゆきしなに——振りかへつて毒々しく言ひかへす）この間抜けの、ど百姓め、あたしがこのために豚箱へぶちこまれる羽目にでもなつたら、その仕返しはきつとしてやるからね。（彼女は出てゆき、戸がばしやりと締まる。）

バーテン　（しばらく心配さうに彼女のうしろ姿を見てゐたが——それから肩をすくめる）なあに、口先だけのこつた。（それから、酒場へ戻りかけて溜息をついて）奴ら虱たかりの宿無しときたら、いつでもこをめちやくちやにしやがる！

——幕——

第二場

舞臺は第一幕に同じ――ミラー家の居間――同じ夜の十一時頃。

ミラーはテーブルの左手前寄りにあるお氣にいりの搖り椅子にかけてゐる。カラーもネクタイも外し、上着も靴もぬいで、古い磨りきれた褐色の部屋着をきて、あんまり體裁のよくない上履きのスリップをはいてゐる。讀書用の眼鏡をかけ、新聞記事に目を走らせてゐる。しかし、心はあきらかに他のことで占領され、惱んでゐるので、讀んでゐるものにあまり注意をはらつてゐない。

ミラー夫人はテーブルの右手前寄りに腰をかけてゐる。彼女も眼鏡をかけてゐる。縫物箱を膝の上において、食卓用の小ナプキンを縫つてゐるのに注意を集中しようとして、一所懸命になつてゐる。しかし、夫の場合と同

じやうに、しかもそれよりも一層はつきりと、心が何か他のことで占領されてゐるのが分る。彼女は明かに神經質にいらいらしながら心を痛めてゐるのである。

リリーはテーブルの向う側にある肱掛け椅子に右向きになつてかけてゐる。彼女は小說を讀むふりをしてゐるが、これもまた注意が亂れてゐる。その表情は、今や悲痛の色がすつかり消えうせて、再び柔順で諦めの面影をみせてゐるが、やつぱり物悲しさうである。

ミルドレッドは右手前方の机に向つて腰をおろし、二つの單語を繰りかへし繰りかへして書き、書き終るたびにペンの手を休めて、結果を批判的に眺め、ちつと舌をかみながらその仕事に熱中してゐる。

トミーは左手前方のソファにかけてゐる。彼は今日一日むやみと動きまはつたので、恐ろしく眠いのだが、それを認めようとしない。彼の目はしばたたいては閉ぢ、頭はとつくりを始めるのだが、眠りこんでしまはうとは

しない。家族の誰かが自分の方を見たと感じると、その度ごとにはつとして目をぱつちり開くのである。

ミルドレッド　（書き終つた二つの語を眺め、やつと満足する）よしと。（紙片を母親の方へさし出して）ねえ、ママ。あたし、自分の名前を署名するのに新しい書き方を工夫してたの。ほかのを見ちや駄目。お終ひのだけ。どう、斷然すごいつて思はない？

ミラー夫人　（何かに心を奪はれてゐたのから引つぱり出されて）そんな下品な俗語を使つちやいけません。男の子だつていけないのに、お行儀がいいと思はれてゐる若い娘が何です――まあまあ、あたしの娘時分にそんなことでも言はうもんなら、お母さんから――

ミルドレッド　よう、よく書けたと思ひません？

ミラー夫人　（また考に沈んで――紙片にちつと目を注いではゐるが――ぼんやりと）さうね、よく書けましたよ、ミルドレッド――本當によく書けましたよ。

（紙片を機械的にかへす。）

ミルドレッド　（すこしむつとしたが、微笑して）心ここにあらざればつて奴ね。本當に見たのかどうかもあやしいもんだわ。（リリー叔母さんに見せるためにテーブルをまはる。ミラーは妻の方へ落ちつきのない眼差しを投げ、それから彼女と視線の合ふのを恐れるかのやうに、いそいで再び新聞へ目を移す。）

ミラー夫人　（自分の前を見詰め――心配さうに溜息する）ああ、リチァードつたら早く歸つてくれればいいのに。

ミラー　まあまあ、エシー。もうすぐ歸つてくるよ。心配することはないよ。

ミラー夫人　でも、心配ですわ、どうしても。

リリー　（ミルドレッドの筆蹟をながめ――微笑しながら）すてきよ、ミルドレッド。あなたのお習字、びつくりするほど上達したわね。でも、すこし字を飾りすぎたんぢやないかしら。

ミルドレッド　（がつかりして）だつて、リリー叔母さん。そこがあたしの一番

苦心したとこなのよ。

ミラー夫人　（また溜息をついて）今、何時ですか、ナット。

ミラー　（冗談口調になつて）ひとつこの部屋へかける柱時計でも買ふか。お前のおかげで二分ごとに懐中時計へ手をやらせられるんだからな。（チョッキのポケットから時計と引きだしてゐたが――強ひて無關心な様子をして）十時ちよつと過ぎただけだ。

ミラー夫人　まあ、あなたつたら一時間前にも同じやうに仰しやつたぢやないの。あたしに心配させまいとして、嘘をついていらつしやるのね。その時計ちよつと見せて下さい。

ミラー　（やましさうに）うん、十一時十五分前だ――だが、さう遲い時刻ぢやないよ――七月四日だつてことを考へれば。

ミラー夫人　七月四日七月四日つて二言目にはおつしやるけれど、やめて頂戴、そんなこと――あなたのお話うかがつてると、七月四日なら人殺しから掏摸にい

たるまで何をしても申譯が立つと思つてらつしやるやうね。

ミルドレッド　（テーブルをまはつて父の方へ紙片をもつてきてゐたが、それを彼の鼻つ先へ突き出す）見てよ、パパ。

ミラー　（この邪魔のはいつたのを、ほつとしてとらへて）どれどれ。ふむ。近頃お前は一週間ごとに新しい署名を發明してゐるやうだな。何のためにさう夢中になつて練習してゐるんだ――小切手でも書くためかい。おいおい、お前、金持のお婿さんをつかまへようと計畫してゐるんだな。

ミルドレッド　（ちよつと頭をコケッティッシにふつて）いやなこつた、結婚式の鐘を鳴らすなんて！　でも、どうなの、これ、パパ？

ミラー　威風堂々としてゐるね――ほかに言葉がないよ。まさに威風堂々たりだ。これなら獨立宣言書に署名したつて恥かしかないよ。

ミラー夫人　（心寂しく、殆んど泣かんばかりになつて）あなたつたら、ミルドレッドと一しよに笑つたり冗談いつたりしていらつしやれば、それでいいでせうさ。

ほんとにこの家でわたしひとりなんだもの、心配してゐるやうに見えるのは――

ミルドレッド　（ちよつと不愉快になつて）だつて、ママ、ディックは、こつそり海岸の花火を見に行つただけよ。待つてりや分るわよ。

ミラー夫人　花火はもうとつくにすんでゐますよ。花火を見に行つたんなら、もう歸つてゐていい時分です。

リリー　（慰めるやうに）きつと座席がなかつたんでせうよ。電車はひどく混みますからねえ。きつと歩いてお歸りなるのよ。

ミラー　（ほつとしてこの言葉をとらへて）うん、さうだ。そいつあ氣がつかなかつた。たしかにさうだよ。

ミルドレッド　ねえ、ママ、ディックの事なんか心配なさらなくともいいのよ。ディックはね、あの馬鹿なミューリエルに失戀したのを見せびらかしたがつてゐるだけなの――そして、自分のことでみんなに大騒ぎさせて、投身自殺でもしやしないかと心配させたがつてゐるだけなのよ。

ミラー夫人　（嚙みつくやうに）お默り！　お前が時々そんな風に言ふのをきくと、お前つて人は心といふのをもたない情無しぢやないかと思ふよ。本當にさ。（夫の方を批難するやうにちらと見て）あなたにはね、わたしの心持がわからないんです。それだけははつきりしてゐますわ。（ミラーは彼女の視線にぶつかつて、うしろめたさうにそれを避ける。彼女は鼻をふんと言はせて、彼から目を離して部屋を見廻す。トミーはこくりこくりやり、目をしばたたいてゐたが、母親の視線が自分の上にくるのを恐れてゐる。彼は拔け目なく體をまつすぐにし、一所懸命努力はしてゐるのだが眠氣の滴たりさうな聲で言ふ。）

トミー　ミッド、書いてたもの、僕に見せて。

ミルドレッド　（冷酷に嘲つて）あんたに見せる？　眠くてどろんとしてゐるくせに、字なんて見えるものか！

トミー　（雄々しく）僕、眠くないよ！

ミラー夫人　（ちつとトミーの上に視線を注いでゐたが）おやおや、お前がまだ

起きてゐるのを、お母さんすつかり忘れてゐましたよ。すぐ二階のベッドへ走つてらつしやい。お前のお休みの時間、とつくに過ぎてるんですよ。

トミー　だつて、七月四日ぢやないか。ねえ、さうでせう、パパ？

ミラー夫人　（夫を批難するやうに睨んで）それ、どらんなさい！　御自分のなさつたことがお分りでせう。あの子があなたの口實を眞似する位のこと、お分りになつてよかりさうなのに！　（それから、トミーに鋭く）お母さんの言つたこと、分つたんですか。

トミー　ねえ、ママ、もうすこし起きてていけません、もうちよつと。

ミラー夫人　いけません！　お母さんの言ふことをきいて、ぐづぐづ言ふんぢやありません。

トミー　（のろのろ立ちあがつて）ああ！　僕、ディック兄さんの歸るまで起きてゐられるといいんだがなあ——

ミラー　（優しく、しかも斷乎として）ぐづぐづ言ふんぢやないつて、お母さん

の言つたの聞いたんでせう。お母さんが行きなさいと言つたら、行つた方がいいよ。（トミーは諦めたやうに自分の運命を甘受し、みんなにお休みの接吻をしてまはる。）

トミー　（接吻して）リリー叔母さん、お休み。

リリー　お休み。よくお寢なさいよ。

トミー　（ミルドレッドにちよつと接吻して）お休み。

ミルドレッド　お休み。

トミー　（接吻して）お休み、パパ。

ミラー　お休み。いいか。ぐつすり眠るんだよ。

トミー　（接吻して）お休み、ママ。

ミラー夫人　お休み。おや！　熱があるやうだね。頭にさはらしてごらん。いいえ、何でもありません。さあ、急いでいらつしやい。お祈りを忘れるんぢやありませんよ。（トミーはのろくさ戸口の方へ行つたが——他の口實が見つかつたの

で顔を輝やかせながら、突然振りむく。）

トミー　ママ、もう一つあるの。昨夜ね、便所へ起きたら——

ミラー夫人　（鋭く）どこですつて？

トミー　お風呂場。

ミラー夫人　言葉遣ひとしちや、その方がようございます。

トミー　シッド叔父さんたらね、霧のときのサイレンみたいな鼾をかいてるんです——僕のお部屋すぐ隣りでせう。どうしたつて眠れないんです——鼾が——（顎のさけんばかりの大欠伸がでる。）

ミラー夫人　霧のサイレンの中にゐたつて、大丈夫、お前は眠れますよ。さあ、走つていらつしやい。（トミーはあきらめ、眠さうににやりと笑つて、寢室の方へゆく。ミラー夫人はトミーのことが心から去るやいなや、不安が十層倍になつて歸つてくる。彼女は溜息をつき、落ちつきなく動き、とうとたづねる）今、何時ですか、ナット。

ミラー　おい、エシー、一分前にさう言つたばかりぢやないか。

ミラー夫人　（無念さうに）どうしてこの問題をさう冷淡にお考へになるんでせうね。だつて、もう眞夜中ぢやありませんか。それだのに、わたしたちのリチァードはまだ外出してゐて、どこにゐるかさへ分らないんですよ。

ミルドレッド　ああ、誰かヴェランダへ來たわ。ママ、きつとリチァードよ。

ミラー夫人　（心配がすぐにほつとした怒りに變つて）あの子をうんと叱つてやつて頂戴、ナット。ようございますね。あなたはあの子に甘過ぎるから、こんな心配なことがおこるんですよ。こんな風におそくまで外出しても何とも思はなくなるんです。（玄關の戸が開いて締まる音がして、誰かが口笛で「もう一度ワルツを踊つてよ、ウィリー」をふいてゐるのが聞える。）

ミルドレッド　あら、ディックぢやないわ。アートよ。

ミラー夫人　（うなだれて）ああ。（間もなくアーサーが表の客間からはいつてくる。靜かに、半ば口の中で口笛をふき、すつかり自己滿足をしてゐるやうである。）